

第一生命財団研究助成報告書

高校入学者選抜システムの地域間比較：
その教育的・社会的影響の多様な在り方に関する
社会学的研究

研究代表者：中村高康（東京大学大学院教育学研究科教授）

2023年3月

目 次

第1部 概要	1
序章 本研究の目的と調査の概要	2
第2部 分析編	7
1章 調査地域の教育意識・行動の概況	8
2章 進路決定過程の地域差	14
3章 内申書・内申点をめぐる地域差	23
4章 その他の入試制度への意識の分析	31
5章 誰が内申点・内申書を気にしているのか	36
第3部 資料編	43
資料1 高校入学者選抜制度の全国的状況	44
資料2 調査票（東京都・ペーパー版）	51

本報告書は、2022年度第一生命財団研究委託事業（地域社会分野）の委託研究助成を受けて実施された研究の成果である。

第一部 概要

序章 本研究の目的と調査の概要¹

1. 研究目的

今日の社会においては「人が人を選ぶ」様々な局面が存在する。そうした「選抜」の局面の中でも、その人の人生にとって様々な社会的活動のチャンスを制約してしまうような大きな局面がいくつかある。入試制度は、教育システムにおけるそうしたチャンスの分岐を生み出すものとして、学術的にも注目されてきた。日本においては、そうした選抜は主として高校入学段階と大学入学段階に集中的にみられてきたものであるが、昨今の高大接続改革（高校と大学の接続を高校教育、大学入試、大学教育一体となって改革しようとするもの）に見られるように、大学入試は社会的にも注目度が高く、研究も相対的に多かった。一方で、高校入試については、ほとんどすべての中学生が巻き込まれる一大イベントでありながら、十分な研究蓄積がない状況であった。

そこで、本研究では、社会の選抜システムの一つとして社会学的に高校入学者選抜をとらえ、この選抜システムがもたらす教育的・社会的な影響を、調査研究によって仔細に明らかにすることを目的とする。その際に、高校入学者選抜制度が都道府県ごとに異なっていることを踏まえ、複数の都県を調査対象に加えて比較をすることで、より蓋然性の高い知見に到達することを目指す。

申請者はこれまで大学入学者選抜制度を中心に研究を進めてきたが、数年前から高校入学者選抜も射程に入れた研究をスタートさせている。その中で、他の研究資金をベースとした全国的なオンライン調査を実施してきたが（中村・林川 2021）、全国調査では都道府県ごとのサンプル数の確保に限界があり、十分な地域間比較が難しい。同時に、公立高校の入試制度は都道府県単位となっており、この都道府県間の質的違いを考慮した分析には限界がある。そこで本研究では、ここに重点的に資源を配分し、単純な全国調査では把握しきれない都道府県間の高校入試の違いとその影響の差異を抽出することを目指す。

具体的には、各都道府県の高校入試制度を様々な情報から整理を試みつつ、最大規模の都市である東京都とその比較対象となる地方の県を一つ事例として選び出し、そこでの入学者選抜制度の特質の整理と文献による実情の把握、当該都県で高校に入学したばかりの高校1年生を対象とした調査データの分析、その他関係者へのインタビュー調査を行い、これら質的情報を加味しつつ量的なデータ分析を行うことを本報告の課題とした。将来的には、これらの調査データの分析を、全国調査のデータと付き合わせつつマッピングする形で、それぞれの入学者選抜システムが教育的・社会的に及ぼす影響をより詳細に特定していく作業を行う予定である。²

¹ 執筆担当：中村高康（東京大学大学院教育学研究科教授）

² なお、本研究においては、研究の進捗状況や研究動向、研究補助者等との議論を踏まえ、

2. 調査概要

本調査研究を行うに先立って、申請者は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(B)）「新学習指導要領導入期における公立中学校と生徒の進路選択に関する追跡的研究」(研究代表者：中村高康、2019～2022 年度、課題番号：19H01638、以下「科学研究」と略)にて、すでに東京都を中心とする高校入試制度の研究に着手してきた。本調査研究はその進行中の科学研究を同時並行でさらに発展させる形で実施された。

科学研究には、以下のメンバーが共同研究者として加わっており、本研究においても内容的に重なり合い相乗効果を狙う体制をとっていることから、本研究の遂行上の協議・意見交換や本報告書作成のサポートを得ることになった。(以下敬称略)

東京大学社会科学研究所	准教授	藤原翔
東京大学大学院教育学研究科	博士課程	田垣内義浩
東京大学大学院教育学研究科	修士課程	伊藤美遥
東京大学大学院教育学研究科	修士課程	山口ゆり乃

2.1 調査対象

本研究の主目的は地域比較であるので、まずは調査対象地域の選定が重要になる。調査計画段階では複数の道府県をサンプリングする予定であったが、予算との兼ね合いで道府県を増やせばその分だけ1道府県あたりのサンプル数は小さくなり、本研究の目的である、より細かな都県間の違いを描くことは困難であることが明らかとなったため、比較対象は1県にしぼることにした。東京都は、すでに科学研究でフィールドとなっていたことや申請者自身が東京都内の中学校と研究上・業務上かかわりが深く、様々な調査資源が活用可能であるとの判断から、調査の中心となることが確定していたが、それと対比可能な道府県を1つ選ぶ必要があったということである。

比較対象を1県に絞るために、東京都とは大きく異なる環境下での高校入試を行う県にすることが合理的であると判断した。例えば、東京都では私立・国立中学校への進学者が全国のなかで飛びぬけて多く、公立高校入試の意味合いも他の道府県と大きく異なる事情がある。そのため、可能な限り公立中心と考えられている地域を対象群として見ておく必要があると考えた。また、東京は人口こそ多いが、地域の空間的広がりという点ではさほど広くない。それは中学卒業者の進路選択にも少なからず影響すると予想される。一方で北海道ほど広く

当初申請段階の調査計画から若干の修正を行った。具体的には次節を参照。

なってしまうと逆に条件が異なりすぎて比較しにくくなる。そのため、ほどほどに空間的広がりがある県を取り上げることに合理性があると判断した。さらに、研究遂行上の情報アクセス可能性などの研究上のメリットを勘案して総合的に判断した結果、最終的に X 県を事例として選ぶことにした。なお、他の研究プロジェクトともリンクできる可能性があることから、X 県については県名を伏せて本報告書では記載する。

アンケート調査の対象者は、高校受験を終えたばかりの高校 1 年生を対象とし、調査の実施時期は準備が整うできるだけ早い時期として夏休み中に回答できるように日程を組んだ。調査対象に関する情報は以下の通り。

調査対象：東京都および X 県における高校 1 年生相当年齢（15～16 歳、平成 18 年 4 月 2 日から平成 19 年 4 月 1 日生まれまで）の男女

総サンプル数：1 5 0 0 （東京：1 0 0 0、X 県：5 0 0）

調査地点数：7 5 地点 （東京：5 0 地点、X 県：2 5 地点）

調査期間：2 0 2 2 年 7 月 3 1 日～9 月 9 日

対象抽出方法：住民基本台帳による層化無作為抽出

調査対象抽出および調査実施：一般社団法人中央調査社に委託

調査方法：郵送による配布を行い、郵送による回収と社会科学研究所のオンラインシステムによる回収を併用

有効回答数：7 7 4 （東京：5 2 4、X 県：2 5 0）

有効回収率：5 1 . 6 % （東京：5 2 . 4 %、X 県：5 0 . 0 %）

郵送をベースとする無作為抽出調査としては、非常に高い回収率となった。調査テーマが当事者である高校生にとって関心の高いものであったことによる部分はもちろんあるが、調査時期や調査票の構成、オンライン回収を並行して行ったこと、また以前に申請者が実施した全国調査（中村ほか編 2018）での回収率向上手法を踏襲して実施したこと、などによる効果があった可能性がある。

なお、以上の調査仕様は、科学研究の助成金を柱に、本研究助成および別の科研費（基盤研究(A)「若年層の地位達成とライフスタイルに関するパネル調査データの収集と因果分析」研究代表者：藤原翔、2023 年度、課題番号：22H00069）によって実施されている。本研究助成では、特に東京都と X 県の比較のためのデータ整備・集計等の調査諸経費として充当された。

2.2 調査方法

サンプリングおよび調査の実施・管理、データ・クリーニング等のデータ作成および基礎的集計業務については、一般社団法人中央調査社に委託している。アフター・コーディングおよび最終的なデータの整備作業は、研究チーム内で実施した。

なお、本調査では、昨今の ICT 環境の整備を踏まえ、郵送と並行してオンラインでの調査実施および回答の回収をおこなった。オンラインの調査実施にあたっては、東京大学社会科学研究所で導入されている Web アンケートシステム LimeSurvey Cloud を用いた。ちなみにオンラインで回収された調査票は 374 票（有効回収票全体の 48.3%）であり、かなりの割合を占めたことも報告しておく。

3. 本報告書の構成

本報告書では、続く第 2 部において、上述のように 2022 年度に実施した高校生調査のデータ分析および高校入試に関する関連データの分析を中心として、特に地域間の差異に注目した基礎分析を行う。具体的には、以下のとおりである。

第 1 章では、まず概要を把握するために、高校受験に関する一般的な状況に関する東京都と X 県の比較を行う。これによって、調査データの特徴を把握するとともに、東京都と X 県の基本的な違いを押さえることで、次章以降の分析の基礎情報を提供する。

第 2 章では、高校生調査において回顧的にはあるが進路決定過程での行動や意識を時点を追う形で尋ねており、それらの項目を中心に選択のプロセスを記述し、地域間比較を行う。

第 3 章では、申請者がこれまで関心をもって取り組んできた「高校入試における内申書」の問題について、質問項目を今回の調査でも盛り込んでいることから、この点の地域間比較を行う。

第 4 章では、内申書問題に限定されない入試制度に関する諸問題の地域間格差を中心としつつ、東京都独自の入試に関する課題を記述的に分析していく。

第 5 章では、あえて本研究調査とは異なるデータを用いて、本研究の中心的テーマの一つである内申書の問題について分析した結果を報告する。

以上が、分析の諸章になるが、本報告書では補足的に以下の二つの情報を「第 3 部 資料編」として掲載した。

まず、本研究に取り組むにあたっての基礎情報として、日本全国の高校入試制度を整理する作業を、調査協力者が行っている。これを参考資料として収録する。公立高校の入学者選抜制度は都道府県により大きく異なることもあり、集約された情報を入手することは意外に難しい。そこで、資料的価値が高いと判断し、本研究の一部として行われた情報整理の成果をここに収めることにした。

最後に、本研究において実施した調査の集計表を都県別に作成し、参考資料とすることと

した。第2部の分析編において参照されていない他の調査項目についても、これにより単純集計情報および地域比較情報を得ることができるため、基礎データとして収録した。

[文献]

中村高康・林川友貴. 2021. 「高校入試における調査書の意味と機能に関する実証的研究（1）：「入試制度と学校生活に関する調査」の仕様と基礎分析」『東京大学大学院教育学研究科紀要』60巻: 373-382.

中村高康・平沢和司・荒牧草平・中澤渉. 2018. 『教育と社会階層：ESSM 全国調査から見た学歴・学校・格差』東京大学出版会.

第二部 分析編

1 章 調査地域の教育意識・行動の概況¹

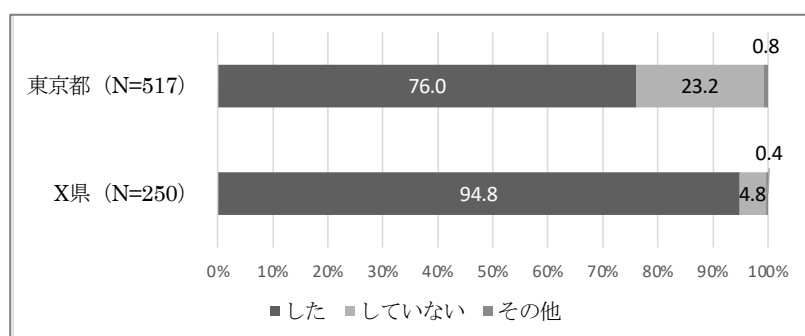
本章では、より踏み込んだ議論に入る前提として、中学校生活・高校受験に関わる概況の地域差を記述する。まず第1節において高校受験経験や学校の設置主体等に関する分布や、親の職業・学歴構成を確認した後、第2節で通塾や進路希望など、教育意識・行動に関する状況を記述する。図表はそれぞれ使用する変数の無回答・非該当を除いた上で示している。

1. 調査地域の概況

1.1 通学に関するデータ

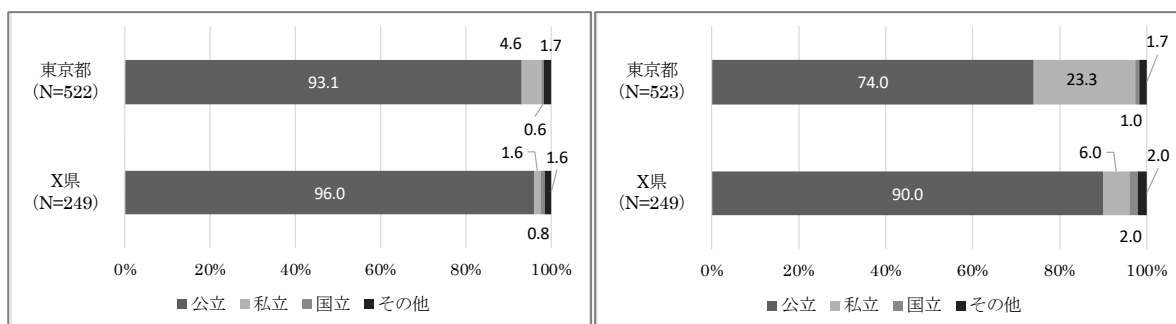
本調査の主眼である高校受験経験の分布を示したのが図表 1-1 である。高校受験経験者は東京都で 76%、X 県で 94.8%と大きな開きが見られる。なお、その他や無回答サンプルを、その後の調査票への回答から 2 値に割り当てた高校受験フラグ変数では、東京都の受験経験者が 400 名（76.3%）となっており、傾向としては一貫している。

こうした高校受験者の分布は私立中高一貫校の多い東京都の特徴を反映している。そこで対象者が通学した小中学校の設置主体を示したのが図表 1-2 である。小学校の時から東京都の方が私立に通う生徒がわずかに多いものの、二地域に大差はない。一方、右の中学校を見ると、公立中学では 15%程度、私立中学では 20%以上もの違いが生じ、東京都で私立が多い。一方、X 県では公立以外には国立の割合が東京都よりもわずかに高くなっている。



図表 1-1 高校受験経験（問 1-3）

¹ 執筆担当：山口ゆり乃（東京大学大学院教育学研究科修士課程）

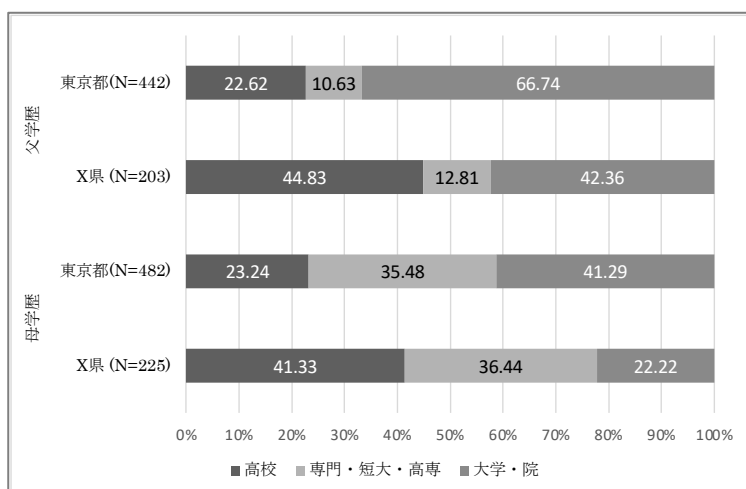


図表 1-2 小中学校の設置者 (間 1-2 ア (左)、イ (右))

1.2 属性に関するデータ

続いて、対象となっている高校生の背景情報を確認する。本節で取り上げるのは親学歴と職業である。図表 1-3 には父母それぞれの学歴分布を示した。このグラフにおいては、無回答・中卒は除かれている。学歴構成は二地域で大きく異なり、東京都で大卒、X 県で高卒の割合が高く、父母ともに 20%程度異なる。さらに、父母で比較すると母親において専門・短大・高専卒の割合が高く、主に女性を中心に短期高等教育が選ばれていた日本の状況も捉えているといえるだろう。短期高等教育の割合については、高卒・大卒に比べ二地域の開きは小さい。

図表 1-4 は問 10 による、家計を主に支えている方の職業の分布である。就業者全員ではなく家族で 1 人であるためか、国勢調査 (2020 年) と比較すると両地域で管理職割合は高くなっている。職業分布において特徴的なのが、X 県の生産現場・技能職である。この割合の高さは、国勢調査においても見られており、X 県の産業特性を反映しているだろう。その一方で、事務・販売職や専門・管理職などホワイトカラー職は東京都と比べ低い割合に止まっている。以下ではこれらの地域の教育意識・行動について検討していく。



図表 1-3 親の学歴分布 (問 7C-1)

図表 1-4 職業分布

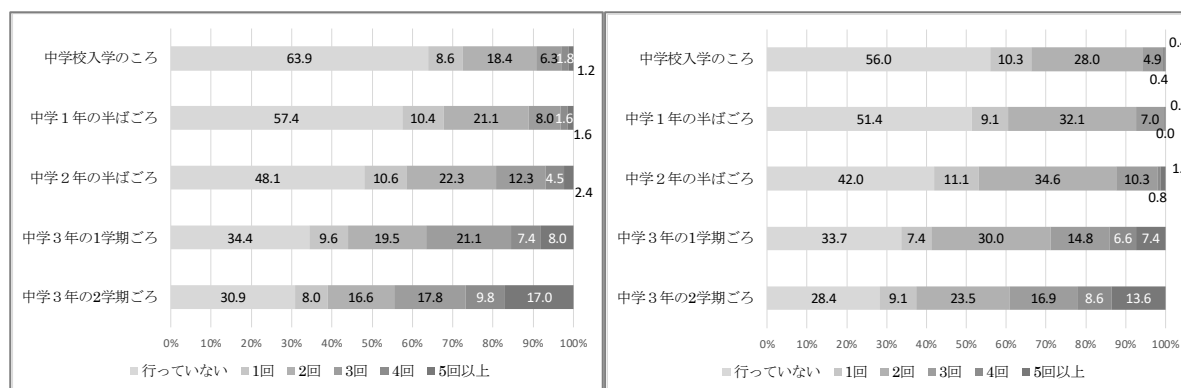
	事務	販売	サービス	生産現場・技能職	運輸	保安	専門・技術職	管理職	その他・働いていない・DK	合計
東京都 (N=508)	18.3	10.6	5.1	8.7	3.4	3.7	19.3	15.0	15.9	100.0
X 県 (N=242)	11.2	5.0	7.0	33.9	6.6	2.1	15.7	9.5	9.1	100.0

2. 教育意識と行動

2.1 通塾と高校受験

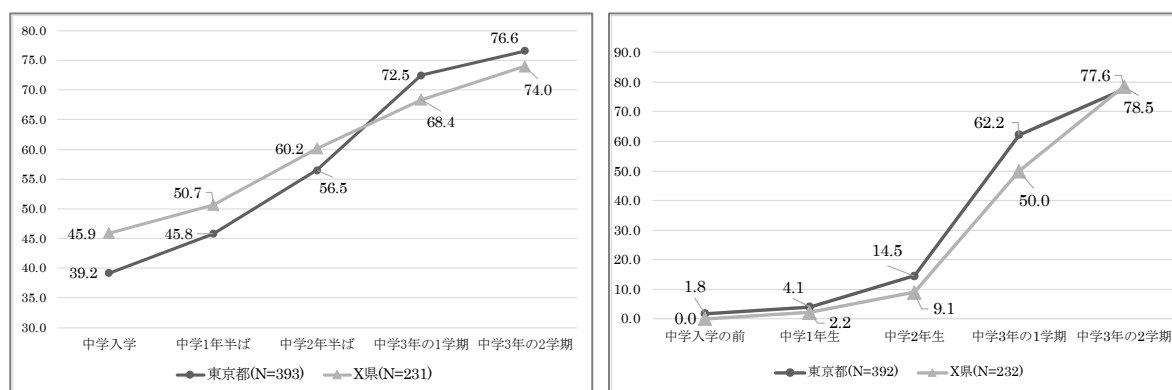
本節では二地域の通塾行動に着目し、中学生がいつから、どれくらいの頻度で塾に通うのかを比較する。さらに、高校受験経験者に限定したときに、これらの様相がどのように変化するかを明らかにする。

図表 1-5 は中学校入学から中学 3 年の 2 学期ごろまでにおける通塾状況を示したグラフである。左が東京都、右が X 県を示しているが、中学校入学のころはいずれの地域も過半数の生徒は通塾していない。中学 2 年の半ばごろから徐々に状況が逆転していき、中学 3 年では約 7 割が通塾していることになる。週 2 回までの生徒の割合はあまり変化しておらず、この通塾割合の変化は、週 3 回以上通う生徒の増加と対応している。中学 3 年の 2 学期ごろについては両地域の分布に統計的に有意な関連は見られないものの、中学校生活を通して、東京都では週 3 回、X 県では週 2 回のボリュームが大きいことが特徴だろう。また、全体の特徴からは中学校入学のころから X 県の方が一貫して塾に通っている割合は高い。このことは、東京都では高校受験をしない生徒は通わないといった可能性が考えられる。そこで、高校受験経験者に絞った通塾経験と、受験勉強をしていた時期の分布を確認した。



図表 1-5 1 週間の通塾回数の変化 (問 2-10: 東京都 N=512 (左)、X 県 N=243 (右))

その結果を示したのが図表 1-6 である。左の図は、高校受験経験者のみに絞って、通塾していた人の割合を示している。両地域の割合に有意な関連はないものの、中学 2 年から中学 3 年にかけて、通塾の傾向に東京都と X 県で逆転が起きていることがわかる。図表には示していないが、通塾していない、2 回以下、3 回以上の 3 カテゴリに分けた場合には、二地域で有意な関連が生じ、上述のように東京都で 3 回以上、X 県で 2 回以下が多い傾向が見られる。右の図では高校受験の勉強をしていた時期を示している。このグラフからは、高校受験経験者に限れば、全体的に東京都の方が受験勉強をしている割合が高い時期がほとんどで、中学 3 年の 2 学期のみほぼ一致する（わずかに X 県の方が高い）。東京都の受験勉強時期が大きく伸びるのは中学 2 年生から中学 3 年の 1 学期であり、元々の通塾割合はこれよりも多いが、それでも多くの生徒が受験に向けて動き始めるタイミングであることが窺える。一方、X 県では受験勉強時期の増加に比して、通塾割合の変化は緩やかである。このことは、受験生になって塾に通い始めるというよりは、通わないかもしくは早い段階から基礎作りとして通塾するといった傾向を示唆しているだろう。

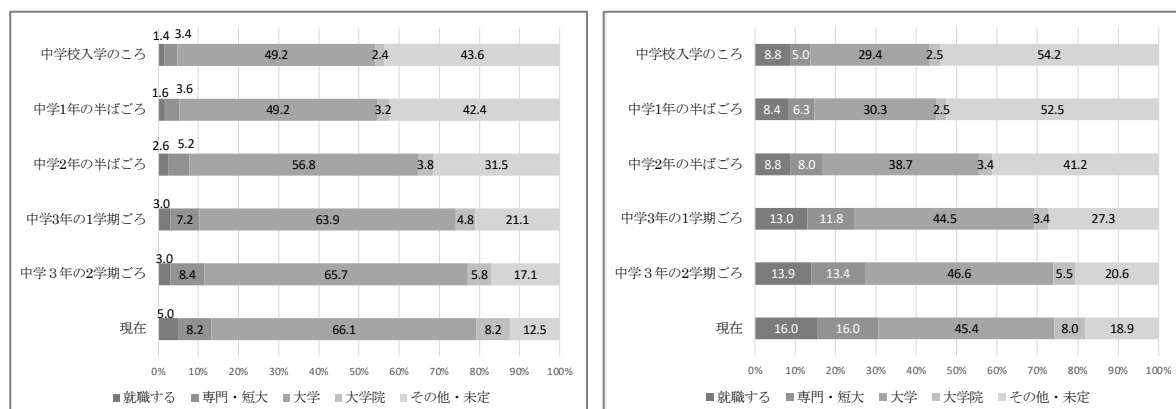


図表 1-6 通塾割合（高校受験者のみ、左）と受験勉強をしていた時期（問 2-11、右）

2.2 進路希望の地域差

上記のような通塾行動を示す中学生は、どのような進路希望を抱いているのだろうか。中学入学時から現在（高校）までの進路希望の変化を示したのが図表 1-7 である。中学 2～3 年にかけて未定の割合は大きく減少していき、進路希望も中 3～現在では比較的安定的となる。二地域で特徴を比較すると、中学 3 年の 2 学期時点で、大学進学希望が東京都で 65.7%、X 県で 46.6%と、20%程度開きがあり、大学進学率とも対応するような傾向である。一方、大学院希望については両地域でほとんど差がない。大学院を希望する層は、あまり地域的特性に縛られない層だということが示唆される。さらに、X 県では就職希望の人の割合が高いだけだけでなく、短期高等教育の志望者の割合が高い。このことは、地域の産業構造とも結びついた進路意識の形成がなされている可能性も考えられる。各学校の卒業者がどのような職につい

ていくかの追跡調査も有意義だろう。

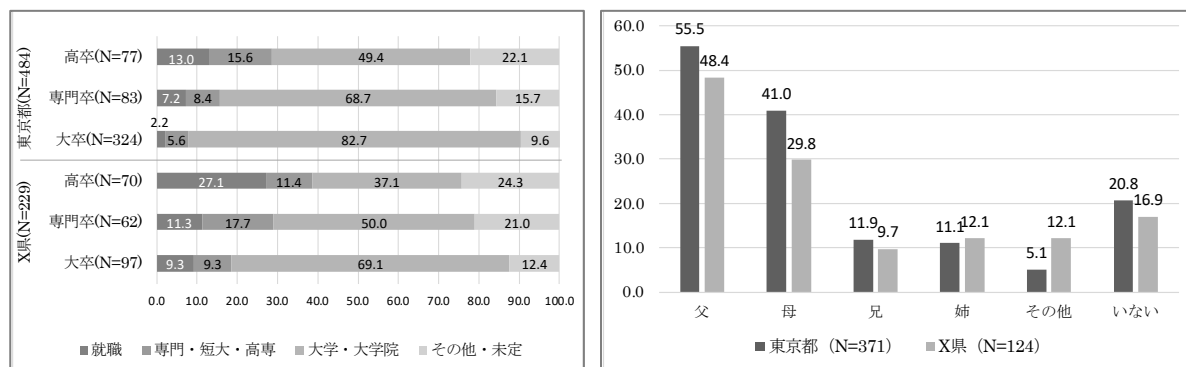


図表 1-7 卒業後の進路希望（問 4-1: 東京都 N=498（左）, X 県 N=238（右））

一方、子どもの進路意識は当該社会だけでなく、もっと身近な家族や友人など重要な他者（significant others）からも影響を受けることが繰り返し指摘されてきている（Sewell et al. 1970 など）。そこで親の学歴と進路希望の関係、大学経験を話してくれた人の割合について示したのが図表 1-8 である。まず左の図の親学歴は、親学歴のうち高い方を採用している。進路希望は現在のものである。このため、「大卒」は少なくとも父母どちらかが大卒以上、「専門卒」は父母少なくともどちらかが短期高等教育卒、「高卒」は父母どちらも非高等教育卒を表している。グラフからは、二地域に共通する特徴として、親学歴に従って高卒～大卒にかけて大学進学希望者の割合が高くなる。東京都と比較して、X 県は親が高卒の場合に同じく就職希望の割合が高いこと、専門卒の場合に専門・短大希望となる一方で、親学歴が大卒の場合でも、就職希望が一定数存在することが特徴的である。

このような進路希望は、いかにして形成されているのだろうか。本調査では、父母や兄姉、その他の人で、各学校段階に通った人と、そこでの経験を話してくれた人を尋ねており、この項目を検討してみたい。大学での経験を話してくれた人の割合を示したのが図表 1-8 の右図である。身近に大学に通っていた人がいたケースのみに絞ったサンプルとなっている。両地域とも、親から話を聞いている割合が高いが、両地域の差は兄姉において縮まる。統計的に有意な関連が見られた箇所としては、母親とその他が挙げられる。東京都は母親から大学の話を聞く割合が高い一方で、X 県では父母兄姉以外の人から大学の話を聞く割合が、東京に比べて高い。割合としては両親の方が高いものの、身近に大学に通っていた人（問 7 C-1）の選択率も X 県の方が高く、母親から話を聞く経験が少なく、かつ外の人と繋がりを持つ可能性が高いのが X 県の特徴だと言える。逆に言えば、東京都は母親学歴で見ても大卒割合が高く、その上自身の大学での経験も子どもに話しやすい傾向にある。こうした傾向が、他の変数を考慮した際にどうなるか、どの時点の進路希望に重要になるのかなどについては今後

の課題としたい。



図表 1-8 親学歴と進路希望（現在、左）、大学での経験を話してくれた人（問 7C-2、右）

3. 終わりに

以上では、高校受験経験者の分布に始まり、親の学歴・職業構成、通塾経験、進路希望の分布を東京都と X 県で比較する形で記述してきた。親の学歴・職業構成や高校卒業後の進路希望には明確な地域差が確認された一方で、通塾経験や中学 3 年の 2 学期には両地域とも受験勉強をする生徒の割合、大学での経験を話してくれる人の割合（母・その他を除く）など、共通点も見出された。さらに、通塾に関しては、通う/通わないの差異は同じでも、その頻度で違いが現れるといった傾向も見られている。本章では基本的には全サンプルを対象とし、両地域全体の教育意識・行動を描くことに努めた。次章では、より高校受験に焦点を当て、高校選択の背後にある地域差を明らかにする。

[文献]

Sewell, William H., Archibald O. Haller & George W. Ohlendorf, 1970, “The Educational and Early Occupational Status Attainment Process; Replication and Revision,” *American Sociological Review*, 35(6): 1014-27.

2 章 進路決定過程の地域差¹

1. はじめに

本章では、高校受験における進路決定過程には東京都と地方県である X 県で地域差があるのかどうか、その基本的な状況を概観することとする。これまで高校受験にとどまらず広く教育選抜の場面に目を向けてみれば、丹念に進路選択の過程が明らかにされてきた実績がある（中村編 2010、山村ほか編 019）。しかし、実のところ、そうした進路選択や進路決定に向かうプロセスに地域による差異があることは、それほど注目が寄せられてこなかったのが現実である。ただし、東京都と地方県では大学進学率に明瞭な違いが存在し、またそうした結果に至る過程についても、中学受験などの早期の選抜の普及度や塾産業の発達度など地域により異なる教育環境のリアリティがみられる。以上とも関連して、本報告書が関心を寄せる高校受験の場面でも、進路決定にまつわるさまざまな側面で地域による違いが現れる可能性が大きいだろう。上記の課題認識から、本章では進路決定においてどのような差異が地域の中にみられるのかいくつかの点から示しておくことで、今後発展的な問いを検討していく際の土台づくりをしておくこととしたい。以下、志望校の選択時期、志望校選択理由、受験において相談した人の 3 点について検討していくことにする。また、本章では高校入試をした人に限定して分析を進めているため、中高一貫校在籍者などは除かれていることはあらかじめ断っておく。

2. 志望校の選択時期

まず、第 1 志望校の決定時期について都県別に検討しておくこととする。ここでも高校数の多さという教育環境の違いを背景として、東京都と X 県で相違が現れる可能性がある。というのも、東京都では同じ学力帯にいくつもの高校が存在することが通常なため、大まかに行きたい高校のイメージは決まっても、具体的な志望校が視野に入るのは遅くなるのではないかと考えられるからである。X 県では対照的に、高校の数が少ないため、中学校の成績によって、どの高校に志学するかが半ば自明になりやすい。

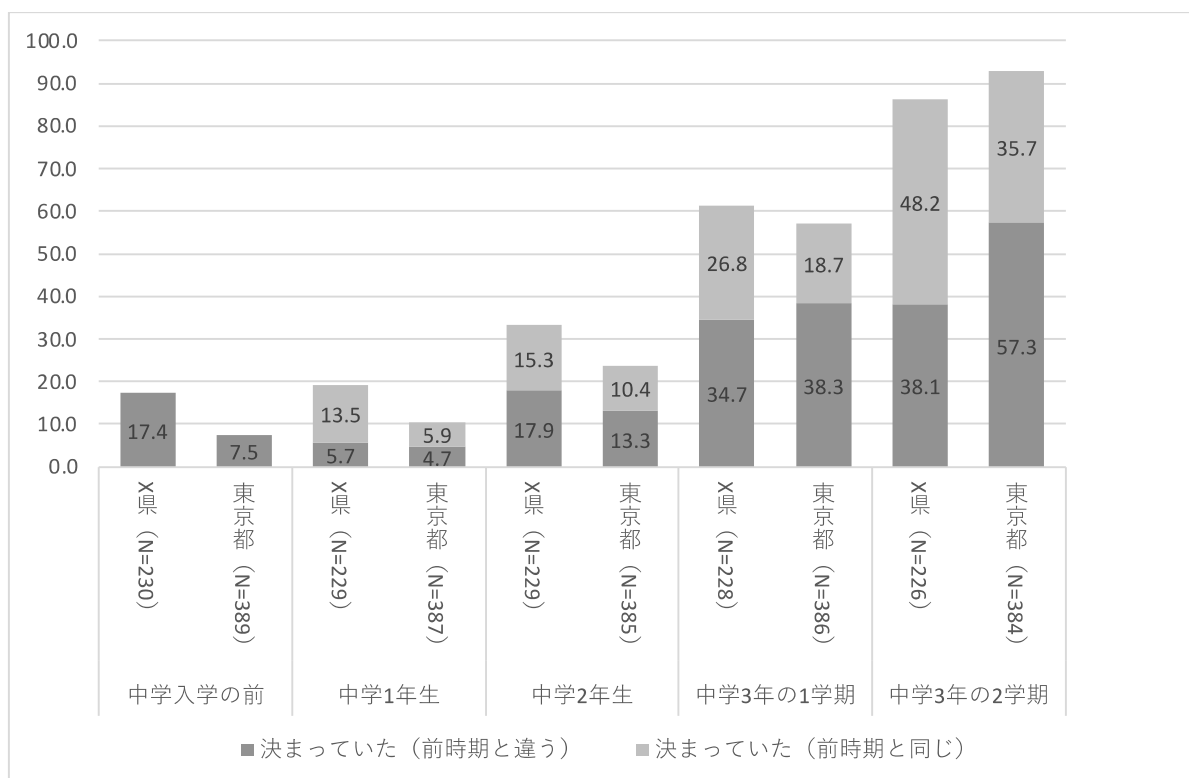
以上を念頭に置き、具体的な検討に入っていく。ここでは、問 3-1 の中の「第 1 志望校は決まっていましたか」という質問項目を用いる。本調査では、先ほども出た時期区分である「ア. 中学入学の前」「イ. 中学 1 年生」「ウ. 中学 2 年生」「エ. 中学 3 年の 1 学期ごろ」「オ. 中学

¹ 執筆担当：田垣内義浩（東京大学大学院教育学研究科博士課程）

3 年の 2 学期ごろ」ごとにこちらの質問をしており、「1. 決まっていた【○）と違う】」「2. 決まっていた【○）と同じ】」「3. 決まっていない」という 3 つの回答選択肢を用意している（○は「イ. 中学 1 年生」における「ア. 中学入学の前」のように前の時期を指している。また、「ア. 中学入学の前」のみ該当する前の時期がないため、「1. 決まっていた」「2. 決まっていない」の二件法となっている）。こちらの質問に対する回答の分布を地域別に％で示したのが、図表 2-1 となる。ここでは、志望校が決定しているに該当する選択肢である、「1. 決まっていた【○）と違う】」「2. 決まっていた【○）と同じ】」の合計のみならず、その内訳もわかるように提示している（「ア. 中学入学の前」のみ前の時期がないので、「決まっていた」の内部での差異はないことには注意）。

図をみると、こちらでも顕著な違いとはいえないかもしれないが、カイ二乗検定の結果、おおよそすべての時期で東京都と X 県で有意な違いが生まれていることがわかった（「中学 3 年の 1 学期」のみ「1. 決まっていた【○）と違う】」「2. 決まっていた【○）と同じ】」の違いを考慮に入れると 10%水準で有意、入れないと有意差なしという結果であった）。結果を詳細にみていくならば、「中学 2 年生」までの早期の時期で X 県において志望校が決定しているものが多い傾向がみてとれる。中でも、時期を問わず、「2. 決まっていた【○）と同じ】」と前の時期から継続して志望しているケースが多いことにその特徴を見出すことができる。ここからは当初の推測通りの解釈ができる可能性が高いだろう。X 県では東京都ほどには高校の数も多くないため、中学校の時の成績によって大まかに〇〇高校だろうと、相対的に生徒の目にも進学する高校が明らかである傾向にあるのではないだろうか。

ここで重要なポイントとも思えるのは、2 節の高校受験の対策時期との傾向の相違である。対策時期に関しては、小さいながら東京都で早い時期から対策している結果があらわれた。その一方で、志望校の選択時期については X 県で早い傾向がある。二つの項目を同時に考慮に入れた分析ではないため、推測の域を出ないものの、それらをあえて対比的に捉えるならば、東京都では受験対策をしつつ志望校の選定を詰めていく、それに対して X 県では志望校が学校生活の早期からある程度見えてきつつ（それほど競争も激しくないため？）受験が近づいてから本格的な対策を開始する、ということになるだろう。



図表 2-1 志望校の選択時期の都県別の割合 (%)

3. 志望校の選択理由

続いて、志望校の選択理由に地域差がみられるか検討していくこととしたい。本報告書の第5章では「中学生と母親調査」を用いて高校の選択理由について選択肢間の関係や規定要因に立ち入った分析がなされているので別途参照いただくこととし、ここではそこに地域という要因がどのように絡み合ってくるのかが主眼となる。例えば、第5章や本研究プロジェクトでメインの焦点となっている内申書は高校を選択する際に地域によってその意味に違いはあるのであろうか。

本節で用いるのは、「問 3-4. 高校を選ぶ上で重視したことはどれですか。あてはまる番号すべてに○をしてください。」という項目である（図表 2-3）。「1. 家の近くにある学校であること」から「17. どれも重視しない」までの17個の回答選択肢が用意されている。東京都とX県を比べたときに、どの項目において違いがみられるのか、また選択肢間を順位づけしたときにそこに地域による差異が現れるのか、これらの点についてみていくこととしたい。

問 3-4. 高校を選ぶ上で重視したことはどれですか。あてはまる番号すべてに○をしてください。また、○をつけた中で最も重視した選択肢の番号を空欄に記入してください。（○はいくつでも）

1. 家の近くにある学校であること	10. 友人と同じ学校であること
2. 学力の面で優秀な学校であること	11. 部活などの面で優秀な学校であること
3. 学校の雰囲気・校風	12. その学校を卒業した後の進学に有利であること
4. 中学校の先生のすすめ	13. その学校を卒業した後の就職に有利であること
5. 塾や家庭教師の先生のすすめ	14. 入試に合格できそうなこと
6. 親や親戚のすすめ	15. できるだけお金がかからないこと
7. 内申点・内申書	16. その他（具体的に
8. 業者テスト（模試）の偏差値	17. どれも重視しない
9. 校内の領域診断テストの点数	

図表 2-2 志望校の選択理由の質問選択肢

図表 2-3 は、志望校の選択理由のそれぞれについての回答分布を%で上位から順に都県別に並べたものとなる。この表をみると、地域によらず受験生に重視されている項目の順番は大きくは似通っていることが読み取れる。たとえば、上位はどちらも「学校の雰囲気・校風」「家の近くにある学校であること」「入試に合格できそうなこと」が並んでいるし、中位には「できるだけお金がかからないこと」、下位には「友人と同じ学校であること」が該当する。この通り、それぞれの地域の選抜状況の差異の存在にもかかわらず、これだけ類似した順位になる項目が多いのは関心が惹かれることである。

しかし、一方で違いが目立つ部分もある。ここでは順位にとどまることなく、両都県の傾向にカイ二乗検定で有意な結果が現れた項目について指摘しておくこととする。まず、どちらの地域でもトップにランクインしているものの、「学校の雰囲気・校風」には 20 ポイント以上の違いがあり、東京都（72.5%）で 4 分の 3 もの回答者から肯定されているなど、その度合いが強くなっている。2 位以降の項目とも 20 ポイント強の大きな差がついていることも重要な点であろう。こうした結果が生まれる背景の検討は今後の課題であるが、ありうる解釈としては東京都で高校が多く選択肢が多岐に渡るために、学力以外の要因を考慮して高校選択を行う余地が生じているのではないか、ということである。実際に、「学力の面で優秀であること」をみると、X 県（41.7%）で東京都（33.5%）よりも選択した回答者の比率は若干高くなっている。X 県では同じ学力帯に高校が少ないことから、その中での校風などの水平的な差異が考慮される機会が減り、東京都と比べ少しでも上へという学力レベルでの垂直的な差異が前面に出やすいのではないかと推測される。

それ以外に目立ったのは、他者からの影響力の違いである。「親や親戚のすすめ」という家族についての項目は地域による違いはなかったが、それ以外の項目、つまり「中学校の先生

のすすめ」「塾や家庭教師の先生のすすめ」「友人と同じ学校であること」については、いずれも X 県で重視する度合いが大きいう結果となった（「塾や家庭教師の先生のすすめ」は 10%水準）。どの項目でも 10 ポイントを超える違いはないため、断定はできないが、地方県で他者を頼って、あるいは他者の進路選択を参照して、志望校を決定していくプロセスがもしかするとみられるのかもしれない。これらは地域による進路結果に差が生まれる重要な背景要因かもしれず、今後より立ち入った検討が求められる。

また、成績に関する項目でも小さいながら違いがみられた。本報告書で特に示しておくべきなのは、「内申点・内申書」に関してである。こちらについては、東京都（36.4%）、X 県（25.7%）と 10 ポイント近い相違がある。どちらの都県でも推薦入試、一般入試ともに内申書は重要な選抜資料の一つとなっているが、もしかすると東京都で重視されやすい何かしらの背景要因が存在しているかもしれない。その一つには、東京都における私立高校の併願優遇制度が挙げられるだろう。東京都では併願優遇制度を使い公立高校入試の前に私立高校の合格先をまず作っておく現象がよくみられる。そうすることで公立高校入試に安心して向き合うことができるのであるが、内申点の高さが併願優遇制度を利用できるか否かの分岐点となっている。このような制度的背景をもととして、東京都でより「内申点・内申書」の肯定比率が高くなっている可能性はある。いずれにせよ、第 5 章では高校選択理由における内申点の位置付けが議論されているわけであるが、その状況には地域による違いが存在するかもしれないことは重要な点であろう。その他にも、「業者テスト（模試）の点数」で東京都が高く、「校内の領域診断テスト（領域診断テストは東京都の名称、X 県では実力テストで尋ねた）の点数」で X 県が高い事情があるものの、この背景には同じく学力検査のためのテストでも両地域でどちらの資料を重視するかの文脈に違いがあることを示している。東京都では V もぎ（進学研究会）や W もぎ（新教育）などの民間企業の模試が多く、それらをペースメーカーとして高校を選んでいく状況がある。そのため、本研究にて実施した塾関係者インタビューでは、校内の領域診断テストは生徒にとって重要な位置づけではなく、中学校教員の資料的価値しかないとの指摘もあった。それに対して、X 県では相対的に民間の模試が発達しているとはいえず、学校内で実施する実力テストがより重要となるということである。

最後に高卒後進路状況の地域差を反映した違いもみられた。「その学校を卒業した後の就職に有利であること」は東京都（14.3%）、X 県（21.3%）と多少 X 県で高くなっている。X 県では相対的に高卒後に就職することが現状でも一定数選択されており、それを受けて高校を選択する段階でも就職の良さを意識していることがここから読み取れるのである。

以上、単純に両地域の類似点と相違点を羅列するのみにとどまってしまったが、それでも東京都と X 県では高校を選ぶ論理に違いがあることは明瞭に示すことができたのではないだろうかと考えている。今後は、第 5 章で行われているように選択肢間の関連に地域差があるのかどうかや、各項目を重視することが高校選択にとってどのような意味を持っているの

か（偏差値の高さなど）について検討することで、これら選択理由のもっている含意をより多角的包括的に理解していくことが重要となる。

図表 2-3 志望校の選択理由の都県別の割合（％）

順位	X県（N=230）	比率	順位	東京都（N=385）	比率
1	学校の雰囲気・校風	47.8	1	学校の雰囲気・校風	72.5
2	家の近くにある学校であること	46.5	2	入試に合格できそうなこと	48.8
3	入試に合格できそうなこと	44.8	3	家の近くにある学校であること	43.4
4	学力の面で優秀な学校であること	41.7	4	内申点・内申書	36.4
5	その学校を卒業した後の進学に有利であること	39.6	5	その学校を卒業した後の進学に有利であること	33.8
6	内申点・内申書	25.7	6	学力の面で優秀な学校であること	33.5
7	親や親戚のすすめ	24.4	7	業者テスト（模試）の点数	27.5
7	できるだけお金がかからないこと	24.4	8	できるだけお金がかからないこと	24.7
9	その学校を卒業した後の就職に有利であること	21.3	9	親や親戚のすすめ	21.8
10	業者テスト（模試）の点数	18.3	10	部活などの面で優秀な学校であること	17.9
11	校内の実力テストの点数	17.4	11	その学校を卒業した後の就職に有利であること	14.3
12	中学校の先生のすすめ	15.7	12	塾や家庭教師の先生のすすめ	10.9
12	塾や家庭教師の先生のすすめ	15.7	13	その他	9.4
14	部活などの面で優秀な学校であること	14.8	14	中学校の先生のすすめ	8.3
15	友人と同じ学校であること	13.0	15	友人と同じ学校であること	6.5
16	その他	7.0	16	校内の実力テストの点数	3.1
17	どれも重視しない	0.4	17	どれも重視しない	1.3

4. 受験において相談した人

最後に受験において相談した人は地域によって違いがあるのかどうかを検討しておくこととする。前節では高校の選択理由において他者の影響があるかどうかに地域差がみられ、X県で他者の意見や選択を参照して志望校決定を行なっている様相が垣間見えた。ただし一方で、そもそも前提として受験についてよく話していたかどうかに地域差があるのかどうかまではわからない。というのも、東京都でも受験についてよく話していたけれども、他者の意見をあまり参照せず高校選択を行なっている可能性があるからである。もし受験についてよく話すことはしていたけれど、先ほどみた通り X 県と比べて高校選択の重視項目とはなっていないならば、それは高校選択の段階ではそれ以上に学校の雰囲気など他の要素が重視項目として前面に出るためであることを意味するかもしれない。

これらの点について検討するために、ここでは「問 3-5. あなたは高校を決める際に、次の人と進路についてよく話しましたか。ア～カそれぞれについて、回答例を参考に、あてはまる時期すべてに○をつけてください。（○はあてはまる時期にすべて）」という質問項目を用いた。時期については「中学校入学のころ」「中学 1 年の半ばごろ」「中学 2 年の半ばごろ」「中学 3 年の 1 学期ごろ」「中学 3 年の 2 学期ごろ」「進路についてあまり話さなかった」である。相談した人については、「母親」「父親」「きょうだい」「中学の先生」「塾や予備校の先生」「友だちや先輩」である。

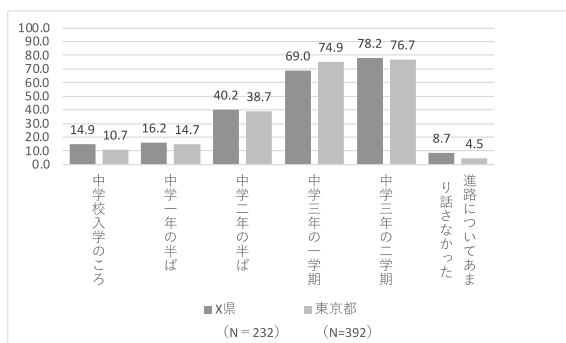
図表 2-4～2-9 は、高校を決める際に相談した人について、「母親」から「友だちや先輩」

までのそれぞれについて、都府県別に回答分布を%で示したものである。まず地域を問わず大きな傾向性をみると、母親や中学の先生は「進路についてあまり話さなかった」回答者が限られることから、時期の問題はあるがこれらの二者とは深く話し合いをした上で高校を選択するプロセスが存在することが確認できる。また、傾斜の度合いには明確な違いがあるものの、予想できる通り、受験が近づくにつれいずれの人とも話しをする比率は高まっていくことがわかる。

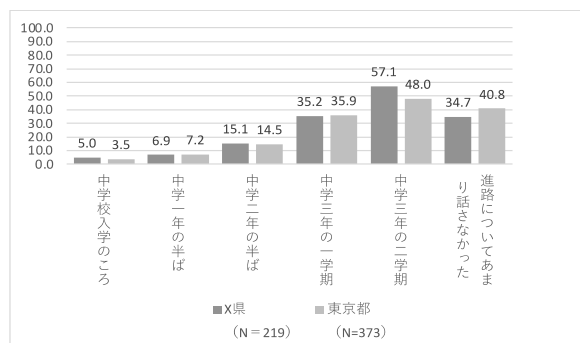
以上の基本的な事実を確かめて上で、ここからそれぞれについて検討していくこととする。まず、母親についてはどちらの都県でももっとも肯定される比率が高く、どの時期でも地域による有意な違いは生まれない（ただし、小さな違いしかないため解釈は保留するが「進路についてあまり話さなかった」ではX県で高い）。これは先ほどの3節における結果とも付合する。しかし、父親に関しては、母親と比べ全体的に肯定率が下がるわけであるが、「中学3年の2学期ごろ」で10ポイント近くX県（57.1%）で高くなっている。そのため、X県では母親とともに父親と、同じ家族であってもより幅広く相談している傾向が少し強いと言えるだろう。また、きょうだいについても同様に、（そもそもきょうだい数には地域差がある可能性はあるが）「中学3年の2学期ごろ」の時期に10ポイント近くX県（29.3%）で高くなっており、「進路についてあまり話さなかった」と回答する比率（65.0%）が低い。この通り、X県では東京都と比べて家族内での多様なつながりを駆使しつつ、それがどのような結果に結びつくかは別として、受験に向き合っていることが可能性として浮かび上がってくる。

続いて、家族外の他者に目を移してみよう。まず、中学の先生について。こちらは両都県とも肯定率が高く、大きな違いがあるとはいえない（「中学1年の半ばごろ」のみ10%水準で有意）。塾や予備校の先生は、顕著な相違は同様にないが、「中学3年の1学期ごろ」で少しばかり東京都（60.8%）が高くなっている。前節では、どちらかというX県で「塾や家庭教師の先生のすすめ」が重視されていることを考えると少し対照的な結果のようにも思えるが、もしかすると東京都では受験が近づくにつれて塾側から生徒に対する高校選択の働きかけが強くなっていることが、この背後にはあるのかもしれない。最後に、「友だちや先輩」は「中学1年の半ばごろ」「中学3年の2学期ごろ」にてX県で高く、「進路についてあまり話さなかった」は反対に低い結果となった。この結果は、前節の結果とも適合しており、やはりX県では多様な人とのつながりを頼りに高校選びを行なっている可能性が浮上する。しかし、先ほどの家族内のつながりと合わせて、この結果が何により生じているのか、そしてこうしたつながりがどのような結果をもたらしているのか、もしかすると地方県のX県でより安定志向の水路づけが他者からなされているかもしれず、これらの点につい

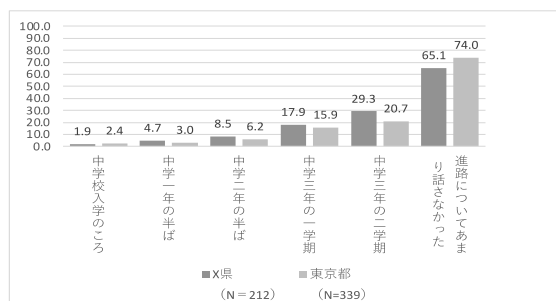
ては今後の検討課題としておきたい。



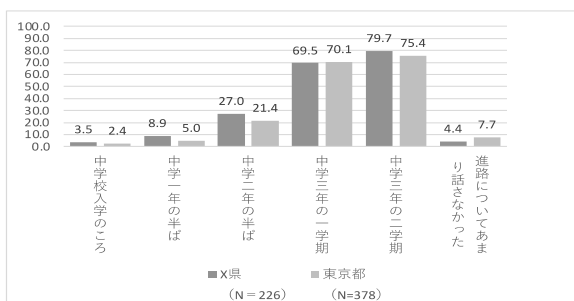
図表 2-4 相談者（母親）（%）



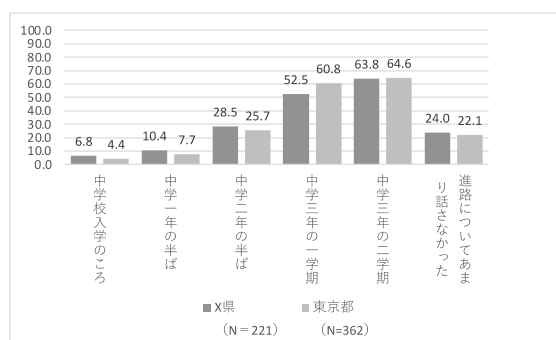
図表 2-5 相談者（父親）（%）



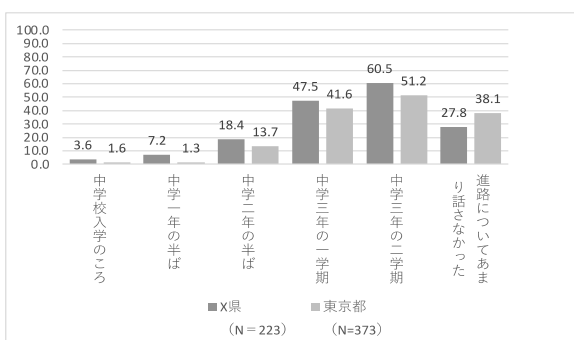
図表 2-6 相談者（きょうだい）（%）



図表 2-7 相談者（中学の先生）（%）



図表 2-8 相談者（塾や予備校の先生）（%） 図表 2-9 相談者（友だちや先輩）（%）



5. さいごに

本章では、進路決定過程の地域差について、志望校の選択時期、志望校選択理由、受験において相談した人の3点から検討してきた。本章では基本的な分析にとどまったものの、それでも高校受験のための対策時期の早さや高校選択の理由など様々な地域による違いが見出

せ、それが地域的な教育選抜状況と絡めて解釈できたことも事実である。これらの点は、これまでの高校入試段階の研究蓄積の薄さも相まってほとんど指摘されてこなかったことから、今後分析を深めていく際の資料的な価値は大きいだろう。

また、上記のような相違点とともに、思いのほか共通点が見つかったのもたしかである。東京都と X 県では社会経済的にも教育環境的にも状況に大きな違いがある。それにもかかわらず、共通してみられる現象が多いことがわかったことも重要な意義として主張したい。

今後は、これらの共通点と相違点という基本的な事実をみつめつつ、それらがどのような背景によって生み出されているものなのか、はたまたそれらは地域の進路実態などいかなる現象に結びついていくものなのか、これらの諸点について検討すべき課題は数多くある。上記の課題を一つ一つ解決していくことで、高校入試において何が起きているのか、少しずつその実態やメカニズムを解きほぐしていくことが求められる。

本章では高校入試をめぐるいくつかの側面から、進路選択にはどのような地域差が生じているのか検討してきた。一方で、高校入試ならではの特徴として、内申書評価が選抜において相対的に重要な位置づけにあることが指摘できるにもかかわらず、その点については深掘りできていないのが現状である。このような課題認識を踏まえ、次章では内申書により焦点を当て、そこにどのような地域差が存在するのか、この点について検討を加えていくこととする。

[文献]

- 中村高康編. 2010.『進路選択の過程と構造: 高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房.
- 山村滋・濱中淳子・立脇洋介. 2019.『大学入試改革は高校生の学習行動を変えるか: 首都圏10校パネル調査による実証分析』ミネルヴァ書房.

3章 内申書・内申点をめぐる地域差¹

1. はじめに

本章では、内申書（調査書）・内申点をめぐる地域差について検討する。高校入試制度における内申書は、戦前に導入されたのち、1960年代の試験地獄批判を背景に重要視されるようになり、今では選抜システムに深く浸透している（中村 2011）。成績のみが選抜の対象となる学力検査と異なり、内申書では生徒の生活態度も評価の対象となる。この点に、戦後の過酷な試験競争の緩和が期待されたわけだが、それと同時に、生徒の学校生活が受験の材料として位置づけられることの問題も指摘されている（中村・林川 2020）。内申書がもたらす影響を明らかにする実証的研究のさらなる蓄積が待たれる現状を踏まえ、今回の調査では、生徒の内申書に対する意識を問う質問を設けた。よって本章では、東京都とX県という、高校入試制度における内申点の比重が異なる都道府県のデータの比較という観点から、内申書に対する意識の基礎分析を行う。また、内申点の比重が都道府県ごとに異なるだけでなく、内申点の分布そのものにも地域差がある可能性を考慮して、本調査では中学3年生の時の内申点を問う質問も設けた。よって、はじめにこの回答を概観したのち、これに照らし合わせながら内申書に対する意識の分析を行う。

2. 内申点の地域差

本節では、調査の回答者が中学校3年生の時の内申点の分布を、東京都とX県で比較する。質問項目 Q2-8 では、「あなたが中学校3年生の時の内申点は、次のどれに当たりますか。正確でなくてもよいので、おおよその値を教えてください。ア～ケそれぞれについて、あてはまる内申点の番号1つに○をつけてください。（○はそれぞれ1つずつ）」と尋ね、「ア）国語」「イ）社会」「ウ）数学」「エ）理科」「オ）英語」「カ）音楽」「キ）美術」「ク）保健体育」「ケ）技術家庭」というそれぞれの教科ごとに、内申点の番号1～5の選択肢を設けた。図3-1～図3-9は、都道府県別に回答結果の分布を%で示したものである。これを見ると、両都県で内申点の分布が大きく異なることが分かる。まず、全体の分布では、東京都は全教科において内申点3の割合が最も高いのに対して、X県では国語、音楽、美術を除く全教科で内申点5の割合が最も高い。なお、音楽と美術は内申点4の割合が最も高いことから、東京都よりもX県の方がより高い内申点に分布が偏っていることが分かる。

¹ 執筆担当：伊藤美遥（東京大学大学院教育学研究科修士課程）

それぞれの内申点の割合を比較すると、内申点 3 と 5 の割合に明確な違いが読み取れる。東京都の生徒は内申点 3 の割合が X 県よりも高く、反対に内申点 5 の割合は X 県の方が東京都よりも高い。英語の内申点 3 の割合を除けば、内申点 3 と 5 の割合の両都県の差はどれも約 7 ポイント以上と大きく、最も差が大きい保健体育の内申点 5 の割合は 19.2 ポイントの差がついている（東京都 14.3%、X 県 33.5%）。こうした内申点の分布の違いは、内申書に対する生徒の意識と関係している可能性が高いと考えられることから、次節ではこの違いを踏まえつつ、内申書に対する意識の地域差について検討する。

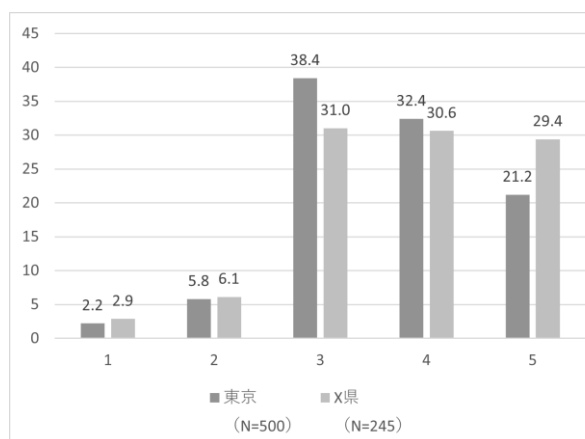


図 3-1 中 3 の時の内申点（国語）（%）

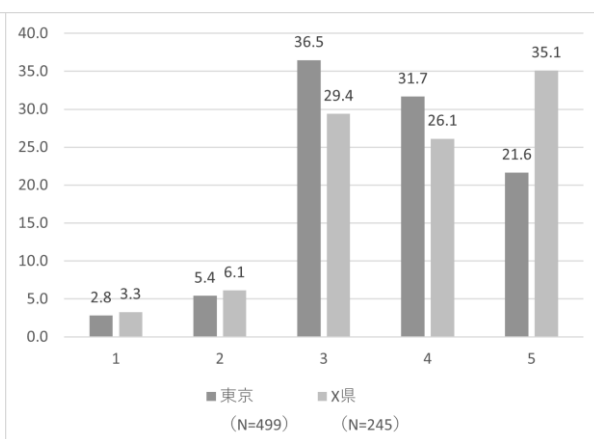


図 3-2 中 3 の時の内申点（社会）（%）

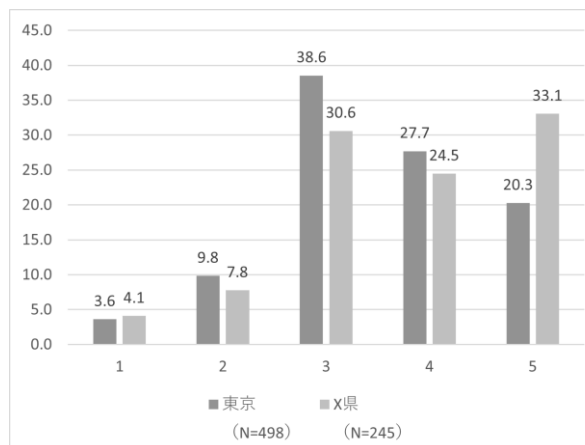


図 3-3 中 3 の時の内申点（数学）（%）

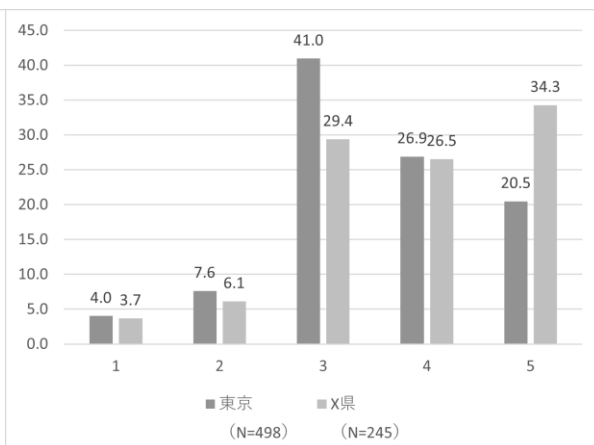


図 3-4 中 3 の時の内申点（理科）（%）

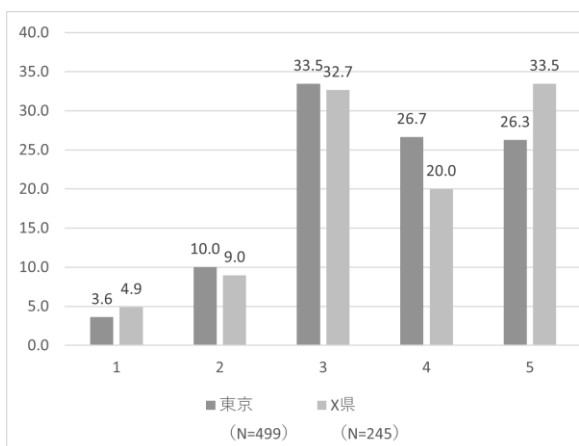


図 3-5 中 3 の時の内申点（英語）（％）

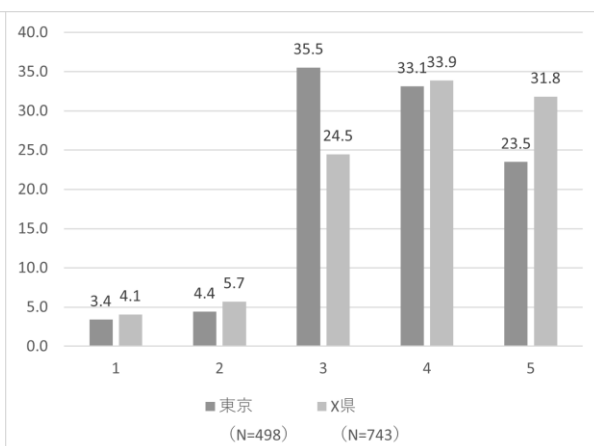


図 3-6 中 3 の時の内申点（音楽）（％）

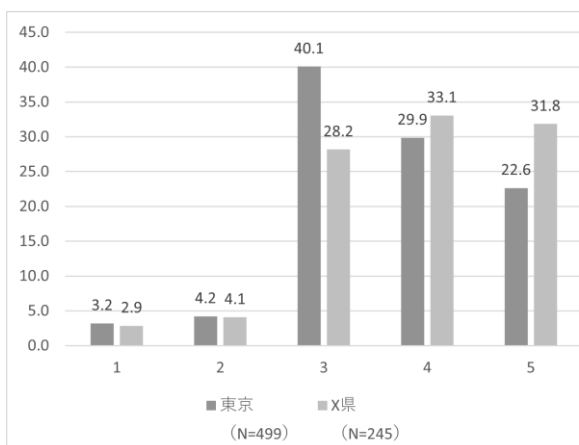


図 3-7 中 3 の時の内申点（美術）（％）

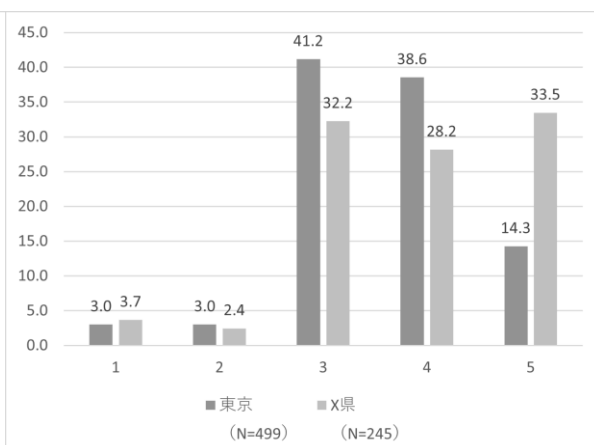


図 3-8 中 3 の時の内申点（保健体育）（％）

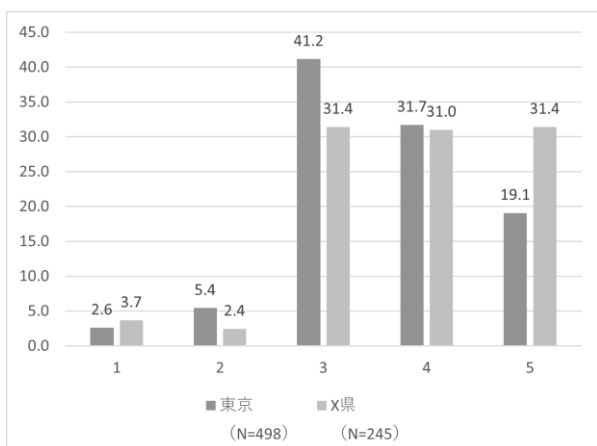


図 3-9 中 3 の時の内申点（技術家庭）（％）

3. 内申書に対する意識の地域差

本節では、高い内申点を取る難易度に対する意識、高校入試における理想の学力検査点と内申点の比率、内申書を意識した時期という3つの観点から、内申書に対する意識の地域差を検討する。

3.1 高い内申点を取る難易度に対する意識

内申点の分布の違いから、X県と東京都では内申点をつける際の基準が異なっている可能性がある。高い内申点の取りやすさについて、両都県の生徒はどう感じているのだろうか。質問項目Q2-4では、「内申書（調査書）について、つぎのようなことはあなたにあてはまりますか。ア～キのそれぞれについてあてはまる番号1つに○をしてください。（○はそれぞれ1つずつ）」と尋ね、内申書にまつわる経験や意識を表す項目ア～キそれぞれについて、「あてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」という4つの選択肢を設けた。ここでは、「カ）高い内申点を取るのは難しいことではない」という項目に注目する。都道府県別に回答結果の分布を%で図3-10に示した。結果を見ると、東京都と比べてX県では、「高い内申点を取るのは難しいことではない」と感じる生徒の割合が高い。具体的にいえば、「あてはまる」「まああてはまる」と回答した人の割合がX県では東京都より6.8ポイント高い（X県40.1%、東京都33.3%）。すなわち、東京都よりもX県の生徒の方が高い内申点を取るのは容易だと感じる傾向がある。こうした意識の違いは、内申点をつける際の各地域の基準と照らし合わせながら今後詳しく検討する必要があるだろう。

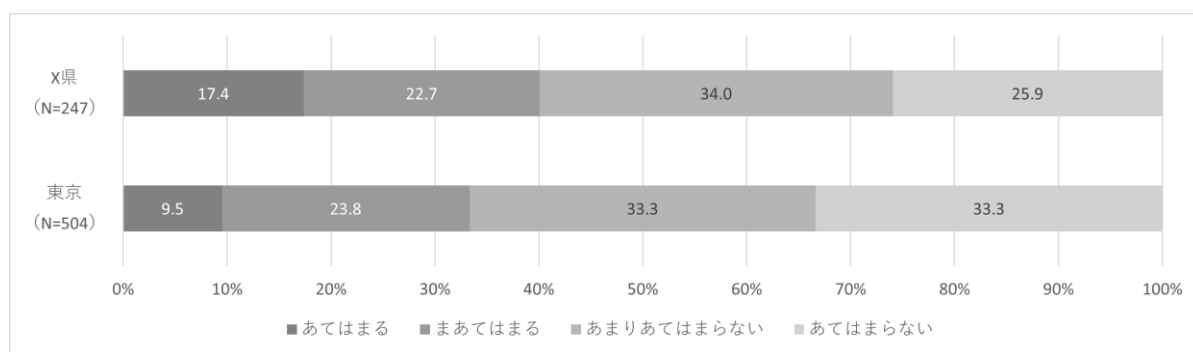


図3-10 「高い内申点を取ることは難しいことではない」と感じる割合（%）

3.2 内申点の理想の比重

高校入試における学力検査点と内申点の比率は、学校や地域によって異なる。学力検査点と内申点の比率は、X県では一般的に5:5、東京都では7:3で評価されている。質問項目Q2-9では、回答者が理想と考える学力検査点と内申点の比率を尋ねた。質問では、「高校入試の評価において、あなたが理想と考える（入試当日の）学力検査点と内申点（調査書）の比率に○を

1つだけつけてください。(○は1つ)」と尋ね、学力検査点と内申点の比率 10 : 0 から 0 : 10 までの計 11 の選択肢を設けた。なお、東京都の調査票には、「現在の都立高校の一般入試では、基本的に学力検査と内申点は 7 : 3 の比率で評価されています。」という文言を質問の文末に加えた。

図 3-11、図 3-12 は、都道府県別に回答結果の分布を示したものである。X 県では、学力検査点と内申点が 5 : 5 の比率を理想とする回答が最も多く、東京都では、学力検査点と内申点が 7 : 3 の比率を理想とする回答が最も多くなった。データ全体からも、東京都が理想とする内申点の比率は、X 県が理想とする比率よりも低い傾向が読み取れる。

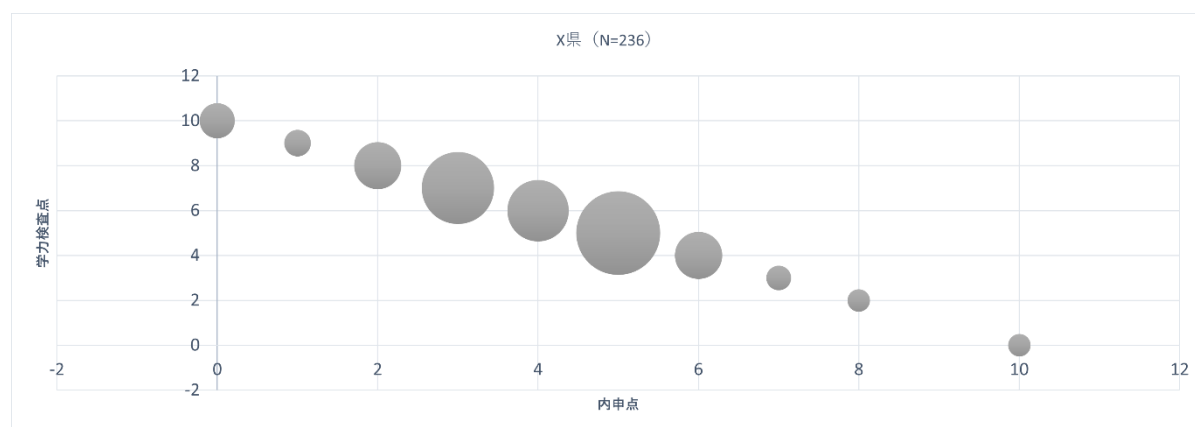


図 3-11 学力検査点と内申書の理想の比率 (X 県)

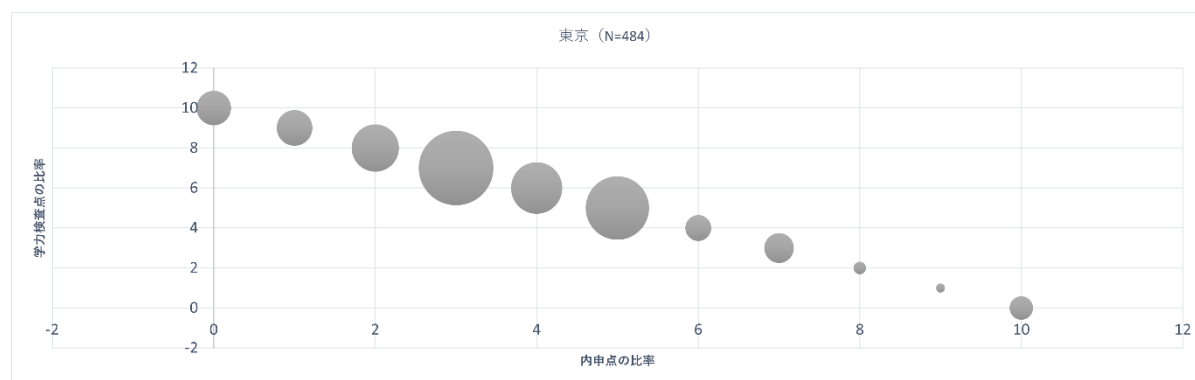


図 3-12 学力検査点と内申書の理想の比率 (東京)

3.3 内申書を意識した時期

X 県の方が東京都よりも高い内申点の割合が高いことや、高校入試における理想の内申点の比率が高いことを踏まえると、X 県の生徒は東京都の生徒よりも受験における内申書を重要視し、より早い段階から内申書を意識するといった戦略的な行動をとっている可能性が考えられる。そこで、最後に、内申書を意識した時期に関するデータを分析する。質問項目 Q2-3 では、「あなた

は、高校受験の際に用いられる内申書（調査書）をどの程度意識して生活していましたか。ア～オのそれぞれの時期ごとに、あてはまる番号1つに○をしてください。（○はそれぞれ1つずつ）」と尋ね、「ア）中学校入学のころ」「イ）中学1年の半ばごろ」「ウ）中学2年の半ばごろ」「エ）中学3年の1学期ごろ」「オ）中学3年の2学期ごろ」という5つの時期ごとに、「とても意識していた」「まあ意識していた」「あまり意識していなかった」「まったく意識していなかった」という4つの選択肢を設けた。都道府県別に回答結果の分布を%で図3-13、図3-14に示した。

図3-13と図3-14を比較すると、内申書を「とても意識していた」「まあ意識していた」人の割合は、すべての時期でX県の方が東京都よりも高い。中学校入学のころの差は大きくないが（X県18.5%、東京都15.6%）、その後、中学1年の半ばごろ以降はいずれも5ポイント以上の差がついている。しかし、内申書を意識しない層には中学受験者が一定数含まれているため、中学受験者を除いた回答結果の分布を%で図3-15、図3-16に示した。すると、東京都で内申書を意識しない人の割合が大幅に減少し、その結果、内申書を意識する時期および意識する人の割合は両都県の間で違いがほとんど見られなくなり、関連も弱まった。このことから、高校受験をする生徒が内申書を意識する時期には地域を超えた普遍性があることが分かる。内申書の比重や内申書の分布が違う両都県で、予想に反してこうした共通点が見出だされたことは注目に値する。

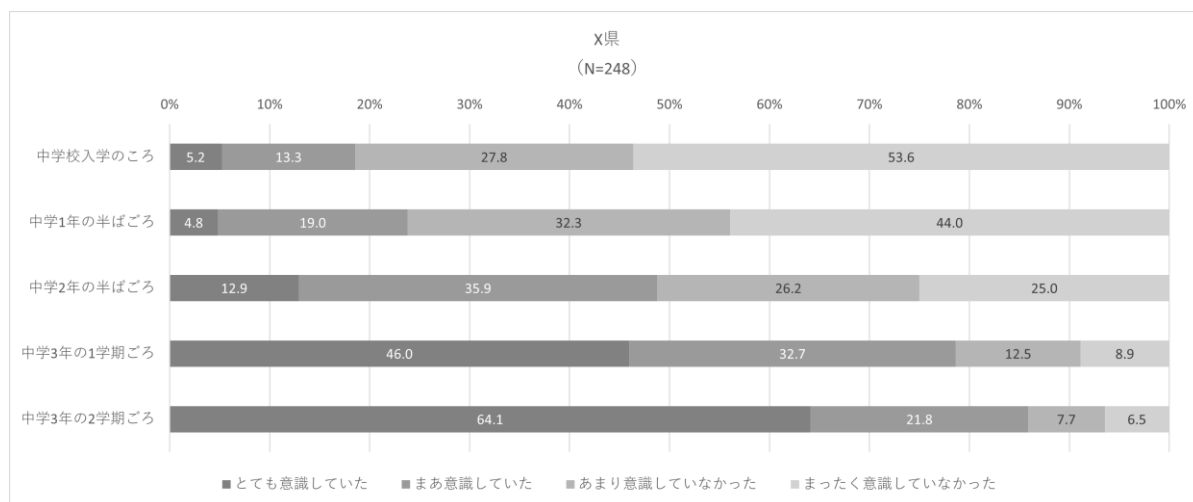


図3-13 内申書を意識した時期（X県 中学受験者含む）（%）

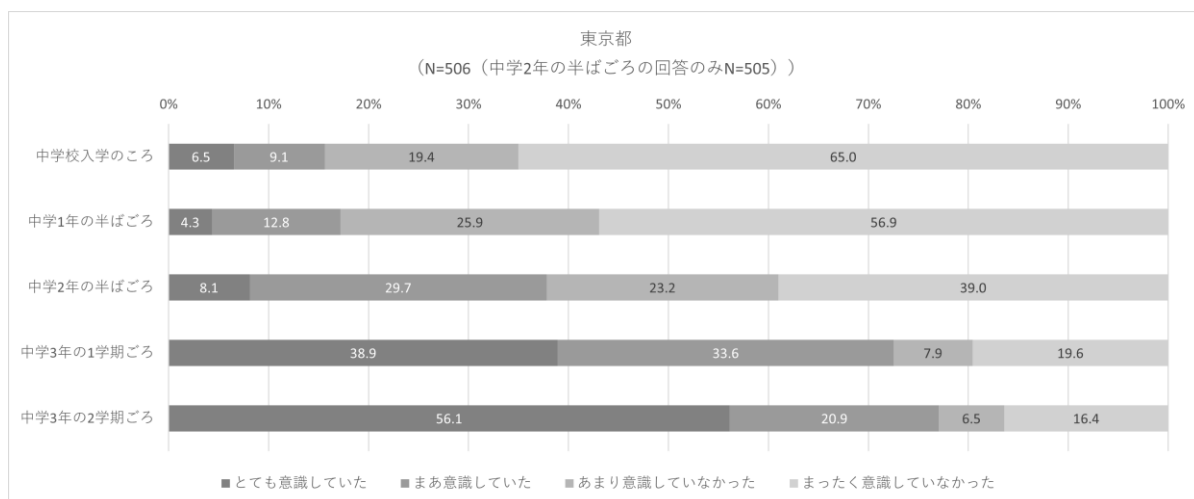


図 3-14 内申書を意識した時期（東京 中学受験者含む）（％）

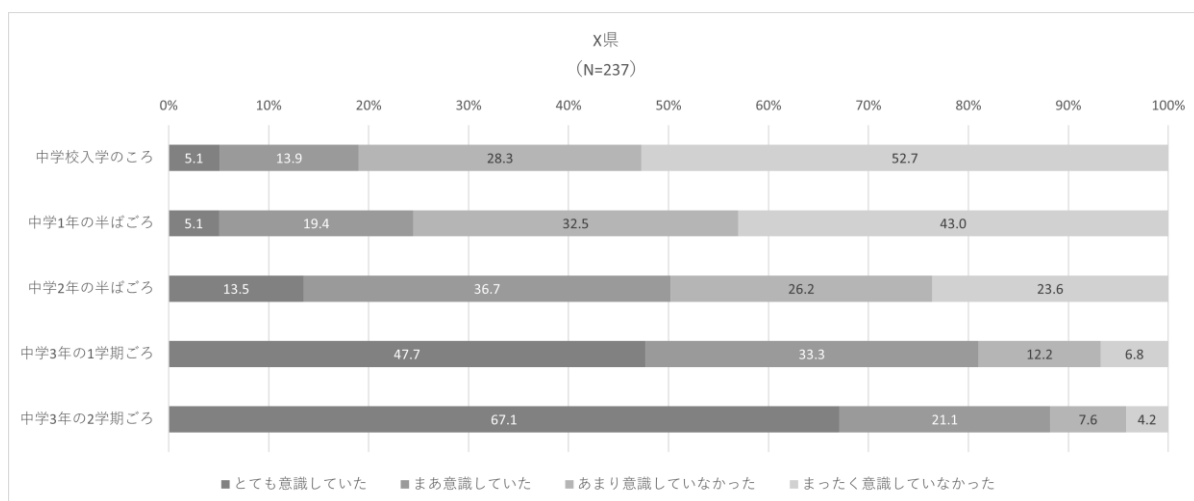


図 3-15 内申書を意識した時期（X 県 中学受験者含まない）（％）

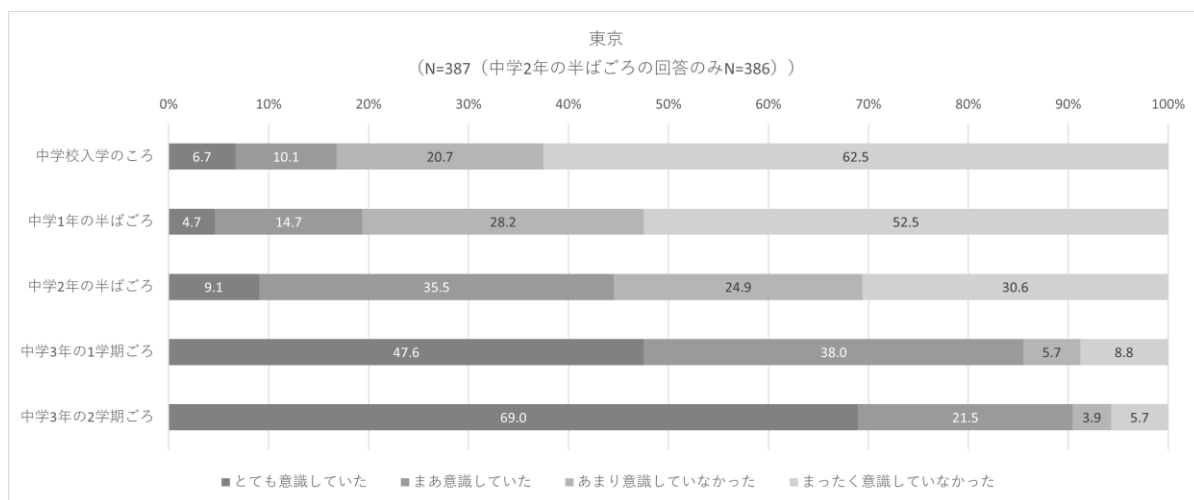


図 3-16 内申書を意識した時期（東京 中学受験者含まない）（％）

4. おわりに

本章では、内申書（調査書）・内申点をめぐる地域差について、X 県と東京都のデータの比較という観点から分析した。その際、内申点の分布と内申書に対する意識に着目した。内申点の分布は、東京都と比べて X 県の方が高い内申点の割合が高かった。また、内申書に対する意識について、高い内申点を取る難易度に対する意識、高校入試における理想の学力検査点と内申点の比率、内申書を意識した時期という 3 つの観点から検討したところ、東京都と比較して X 県の方が、高い内申点を取ることは難しいことではないと考える生徒の割合が高く、高校入試における内申点の比率が高いことを理想とする傾向が見られたのに対し、内申書を意識する時期には地域差がないことが明らかになった。次章では、高校入試制度の多様な仕組みに焦点を当てて当事者意識の地域差を中心に検討する。

〔文献〕

中村高康，2011. 『大衆化とメリトクラシー—教育選抜をめぐる試験と推薦のパラドクス』東京大学出版.

中村高康・林川友貴，2020，「高校入試における調査書の意味と機能に関する実証的研究

（1）：「入試制度と学校生活に関する調査」の仕様と基礎分析」『東京大学大学院教育学研究科紀要』60：373-82.

4 章 その他の入試制度への意識の分析¹

1. その他の高校入試制度に関する当事者の意識について

前章では、内申書に対する行動・意識を検討したが、高校入試制度はそのほかにも様々な仕組みが組み入れられており、それらに対する意識も、その生徒の立ち位置や地域によって異なってくると予想される。また、とりわけ東京都においては、社会的にも話題となっている制度（スピーキングテストや男女別定員）も抱えている。本研究の調査では、部分的にはあるが、これらの諸相をとらえることができる質問項目を調査票に入れて、その反応を探る手掛かりを得ることを目指した。そこで本章では、これらの質問項目の集計結果を用いて、様々な高校入試制度への当事者の意識を地域別に比較した基礎分析を中心に示す。また追加的に、東京都独自の入試状況に対する設問の集計結果についても言及する。

なお、本章で分析に用いている主要な質問項目は、調査票東京都版の Q3-7 である。「高校入試に関する次のような経験や考え方について、あなたにはどれぐらいあてはまりますか。ア～コそれぞれについてあてはまる番号 1 つに○をつけてください。」と尋ね、それに対して「あてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」「わからない」の 5 つの選択肢から選んでもらうものである。なお、一部の項目は、東京都のみで尋ねていたり、あるいは東京都と X 県で実態に合わせるために文言を変えてたりしている質問がある。それについてはその都度言及する。なお、以下の分析はすべて、高校受験を経験した対象者のみに限定して集計している。

2. 高校入試制度に対する意識の地域間比較

まず東京都と X 県で比較できる項目から見てみたい。次の図表 4-1 は、これらの項目に対する回答の都県別の分布を％で示したものである。イ) とク) については、地域によって調査票の文言が異なるため、カッコ内に X 県版のワーディングを記載してある。ケ) はカッコ書きがあるが両都県共通の項目である。

東京都立高校入試は 1 月下旬に行われる推薦入試のあと、2 月下旬に一般入試が実施される。多くの都道府県では公立高校の受験機会は複数回行われているが、比較対象である X 県でも同様に 2 回（前期と後期）という形で実施されている。そこでこれについての評価を見たのがイ) の項目である。地域の違いを若干反映して X 県で肯定率が高くなっているが、どちらにおいても 2 回の機会があることはおおむね肯定的に受け止められていることがわかる。

¹ 執筆担当：中村高康（東京大学大学院教育学研究科教授）

ウ) はしばしば指摘される調査書点（内申点）の学校差についての意識である。どちらの都県でも非常に多くの受験生たちが学校差を感じ取っていることが見て取れる。かつての相対評価から絶対評価（目標に準拠した評価）に変わり、建前的にはこうした差はないはずであるが、当然ながら学校の実情や教師ごとの評価の視点の差異があり、理念通りにはいかない。こうした問題を克服する試みもあり²、今後改善が求められる部分といえる。なお、図表は省略するが、中学3年時の成績自己評価別にこの表を見てみたところ、東京でもX県でも、もっとも成績自己評価が高い層でこの学校差を認める率が高いことも見て取れた。

次に、キ) コ) について触れておくと、これらは科学研究でインタビュー調査をおこなったり、あるいは文献等で情報収集したりする中で、インフォーマルに近い形で行われている実態があると指摘されていたものを項目化し、実態把握の一助にしようとしたものである。キ) については、かつて「事前相談」といわれていた仕組みで、私立高校の入学試験を受ける前に事前に中学校教員ないしは受験者本人（保護者）が当該私立高校教員と面談し、模擬試験の成績などを提示することで合格の示唆を得るものである。詳細については今後の調査課題であるが、今回の調査項目に組み込んだところ、「とてもあてはまる」「まああてはまる」が東京で14.1%と少なくない割合の反応があった。ただし、X県のほうは東京より少なく、そもそも「わからない」生徒が半数ほどいる点でかなり異なっている。コ) については、実態としてはあまり広がっていないとみられる。

ケ) については、国の制度として「就学支援金」（公立私立を問わず一定の所得以下の生徒に支給される）があり、かつてに比べて私立高校には経済的な意味では格段に通いやすくなっているが、東京都の場合は独自に「私立高等学校等授業料軽減助成金」制度を設け、さらに手厚く支援している。こうした状況下で「選択肢が広がった」と感じている生徒がどの程度いるのかを示している。これについては、一定の生徒がそのように感じているものの都県間の差異はあまり明確ではない。ただし、東京のほうが私立に通っている生徒が多いわりにはその恩恵を生徒自身はそこまで明確には感じていないとも見ることができる。表は省略するが、通っている高校が私立であろうと公立であろうと、東京ではさほど分布が変わらない。制度の効果も含めて、詳細な検討を要する部分である。

ク) については、X県では中学校内で定期テストとは別に実力テストが行われている。東京都では学校外の「領域診断テスト」が用いられている。東京ではこれとは別に違う時期（主に3年生対象）に各生徒が個人で業者テストを受けるケースが多いといわれるため、この領域診断テストの位置づけを見る設問にもなっている。これを見ると、X県における実力テストはかなり受験生の参考になっているようだが、東京の領域診断テストは微妙な位置づけと

² 例えば京都府乙訓地方で校長会がリードして作成された地域共通の「乙訓スタンダード」の事例がある（西岡 2016, p.261）。本研究ではこの関係者への聞き取り調査も実施した。

いえる。学校で実施しているため、学校の指導上の参考にはなっていると考えられる。³しかし、生徒にとってはそこまで大きな位置づけが与えられていない面があり、これは別の項目を用いた2章の分析でも示した通りである。

図表4-1 高校入試制度に対する意識の都県別の割合（％）

		とてもあ てはまる	まああて はまる	あまりあ てはまら	あてはま らない	わからな い	無回答	N
イ) 公立高校入試は推薦と一般（前期と後期）の2回ある方が良い	東京	43.5%	13.0%	5.3%	3.5%	25.8%	9.0%	400
	X県	57.8%	14.8%	2.5%	4.2%	12.7%	8.0%	237
ウ) 内申書評価には学校差があると思った	東京	47.0%	15.8%	5.5%	3.3%	19.8%	8.8%	400
	X県	40.9%	21.9%	7.2%	0.8%	21.1%	8.0%	237
キ) 私立高校の面談で模擬試験の成績を求められた	東京	9.3%	4.8%	6.5%	38.0%	32.8%	8.8%	400
	X県	3.0%	3.4%	5.9%	30.4%	48.5%	8.9%	237
ク) 校内の領域診断テスト（実力テスト）の点数は参考になった	東京	4.8%	15.3%	22.8%	19.8%	28.7%	8.8%	400
	X県	13.1%	30.8%	20.7%	12.2%	15.2%	8.0%	237
ケ) 私立高校の授業料の負担軽減（私立高等学校等授業料軽減助成金事業）のおかげで受験校の選択肢が広がった	東京	11.8%	9.5%	8.5%	27.8%	33.8%	8.8%	400
	X県	9.3%	14.3%	13.1%	25.7%	29.1%	8.4%	237
コ) 塾の推薦制度で私立高校に合格した	東京	0.8%	0.5%	3.0%	61.5%	25.0%	9.3%	400
	X県	0.8%	1.3%	3.4%	61.6%	24.1%	8.9%	237

3. 東京都における都立高校入試制度独自の課題

前述したように、本調査研究では東京都独自の課題についても、わずかではあるが項目に組み込んでいる。これらについても結果を示しておきたい。東京限定で設問を行ったのはQ3-7 のア) およびエ) ～カ) の4項目であり、次の図表4-2の各項目である。

図表4-2 高校入試制度に対する意識（東京限定項目）の割合（％）

東京都サンプルのみの回答	とてもあ てはまる	まああて はまる	あまりあ てはまら	あてはま らない	わからな い	無回答	N
ア) 推薦入試の集団討論がなくて良かった	41.5%	8.5%	4.8%	5.0%	31.3%	9.0%	400
エ) 男女別に入学定員があるのは不公平だ	31.0%	18.5%	14.2%	11.5%	16.0%	8.8%	400
オ) 面接が嫌だった	26.3%	16.5%	16.5%	15.0%	16.8%	9.0%	400
カ) 英語のスピーキングテストは高校入試にあったほうが良い	6.0%	7.8%	18.5%	41.5%	17.5%	8.8%	400

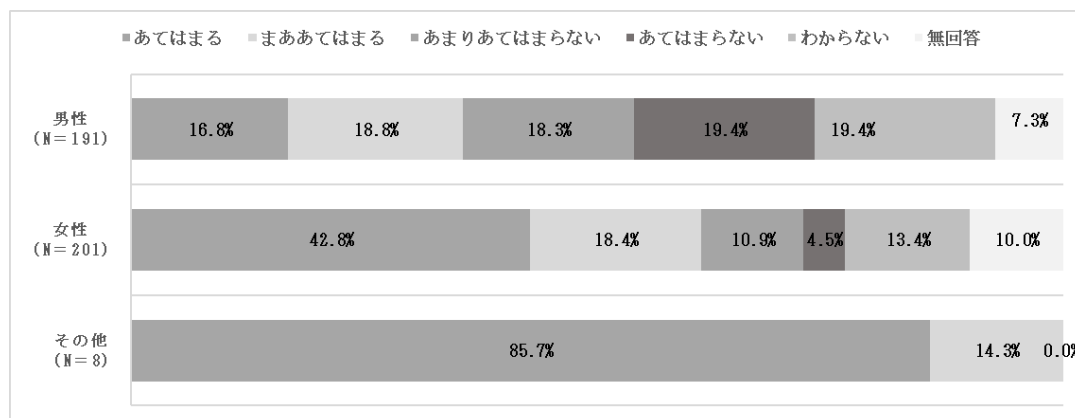
ア) に関しては、新型コロナウイルス感染症の影響で当該学年の都立高入試では推薦入試における集団討論が中止されたことをうけて項目化したものである。全体としてその判断は支持されているようにも見えるが、「わからない」の回答の多さにもあるように、私立高校中心の受験をした生徒なども含めて、設問の意味がどの程度理解されていたのかについてさらなる検討が必要である。また、オ) の「面接」については、2020年実施調査の自由回答に「面

³ 2021年8月24日都内公立中学校進路指導担当教諭へのインタビューより。

接」の問題が書き込まれがちだったことから項目化している。これについても「嫌だった」がやや多くなっているが、こちらも回答者の状況によって反応が変わってくることも予想されることから、さらなる精査が必要であり、ここでは単純集計の結果のみを提示するにとどめておく。

エ) の「男女別定員」については、ジェンダー平等の観点からの問題点を指摘され、2024年度実施の入試までで廃止されることが決まったとの報道がなされている。これについては、東京都の受験生はまさに当事者でもあったので確認してみた。単純な集計でも「不公平」とする割合が高くなっているが、これに関してはジェンダー差があると予測されることから、性別の項目とのクロス集計を行ってみた(図表4-3)。これを見ると、予測通り、男性よりも女性のほうが「不公平」とする意識が圧倒的に高いことが確認できる。また、サンプル数が少ないため参考数値にとどまるが、性別の設定で「その他」と回答した8名については、7名が「とてもそう思う」、つまり強く「不公平」とする回答をしており、「女性にとって不公平」という問題とは別に「その他」のカテゴリーの生徒たちにとっての意味を考慮する必要性も想起させる結果である。これは高校入試に限らない問題である。

図表4-2 性別に見た「男女別定員は不公平」に対する意識(東京限定項目)(%)



最後にカ) の英語スピーキングテストであるが、2023年都立高校入試において組み込まれることが決まり、実施されたものである。ただし、この調査の対象者は2022年3月現在の高校1年、つまり実際の制度実施の1年前に中学3年生だった生徒たちであり、都内公立中学に通っていた生徒であってもプリテストを受けただけである。しかし、社会的にも話題となった制度であり、東京都の受験生だった生徒たちの反応を確認しておくデータも必要との判断から、項目に組み入れている。この集計結果をみると、当然ではあるが負担の増えるテストに対する拒否反応は、すでに受験を終えた生徒たちにも明らかに見える。

4. おわりに

以上、簡単ではあるが、具体的な高校入学者選抜制度に関する意識の項目について、地域間の違いを探りつつ、東京都独自の課題についても結果を報告した。本調査のデータは、今後さらに精査して、様々な変数の影響を考慮した専門的な分析をさらに進めていく予定であるが、シンプルな地域比較などからも引き出される問題は少なくない。高校入試制度はこうしたデータも踏まえながら今後も引き続き検討がなされていく必要があるだろう。

〔文献〕

西岡加奈恵，2016．『強化と総合学習のカリキュラム設計：パフォーマンス評価をどう活かすか』図書文化．

5章 誰が内申点・内申書を気にしているのか——「中学生と母親パネル調査」から

1. 目的

高校受験に利用される内申書（調査書）は、中学生の行動に大きな影響を与えていることが指摘されている（中村・林川 2020）。

本章では、2015年に開始された「中学生と母親パネル調査」のデータを用いた分析によって、誰が高校選択の基準として内申点や内申書を重視しているのかを計量分析によって明らかにする。本調査は、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターが、調査会社の保有するモニターから無作為に抽出された2000年4月から2001年3月生まれの2015年度に中学3年生であった生徒1854名とその母親を対象に実施している。2017年（高校2年生にあたる）、そして2019年（高校卒業後1年目）にも子どもたちと母親への調査が行われ、2019年からも子どもたちに対して継続的に調査が実施されている。詳細については藤原（2021）やFujihara and Tabuchi（2022）に記載されている。

この調査のデータを用いて、内申点・内申書に関して、以下の3つの問いに取り組む。

- (1) 中学卒業後の学校選択において、内申点・内申書はどの程度重視されているのか。
- (2) 中学卒業後の学校選択において重視される項目間の関連はどのようになっているのか。内申点・内申書は他のどの項目と関連しているのか。
- (3) どのような生徒が内申点・内申書を重視しているのか。

2. 学校を選ぶ上で内申書はどの程度重視されているのか

「中学生と母親パネル調査」では、2015年に中学3年生に対して「学校を選ぶ上でどのようなことを重視しますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。（○はいくつでも）」という質問をたずねている。選択肢は次の図表5-1のようになる。

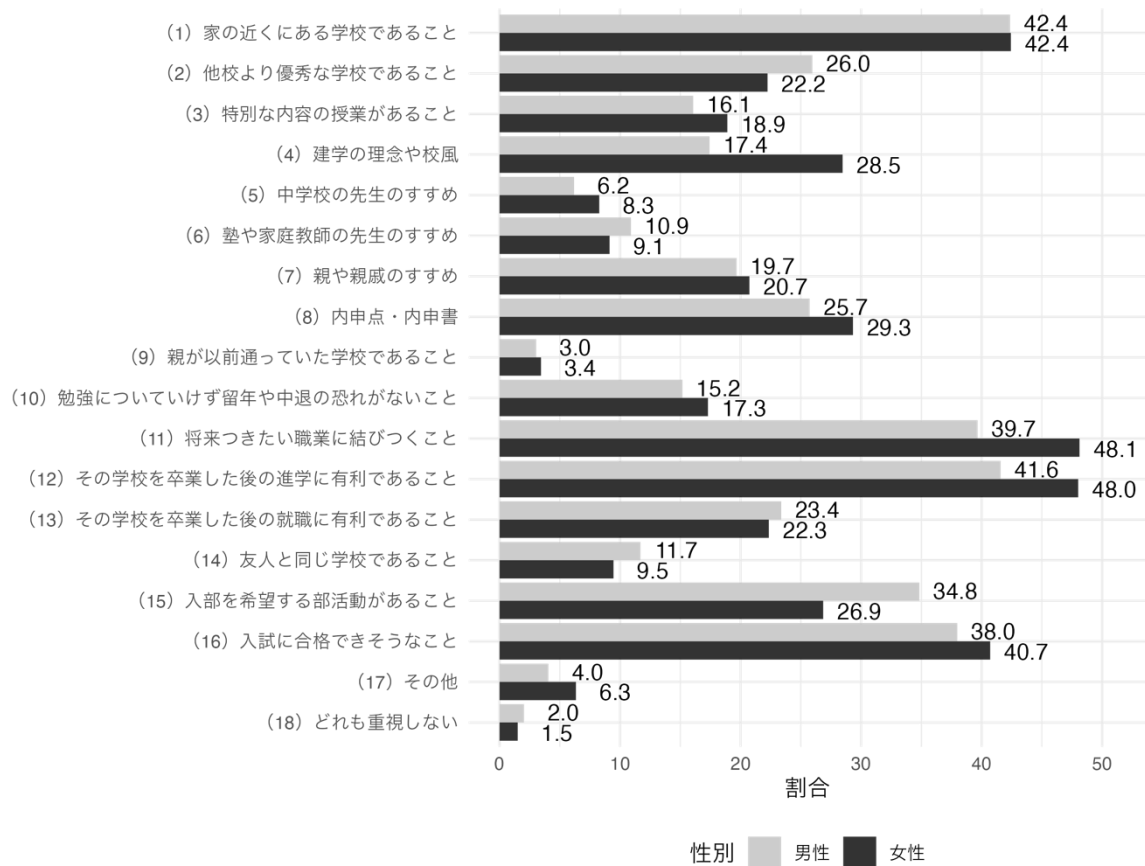
この質問に対する回答を集計したのが図表5-2である。男女ともに、「(1) 家の近くにある学校であること」、「(11) 将来つきたい職業に結びつくこと」、「(12) その学校を卒業した後の進学に有利であること」、「(16) 入試に合格できそうなこと」が上位を占めている。また、「(15) 入部を希望する部活動があること」も比較的重視されている。そしてこの部活動と同程度に重視されているのが、「(8) 内申点・内申書」である。男子では25.7%、女子では29.3%が高校を選択する上で内申点・内申書を重視していることが分かる。

図表 5－1 質問と選択肢

問 18 ^{がっこう えら うえ} 学校を選ぶ上でどのようなことを重視しますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。（○はいくつでも）

1 ^{いえ ちか} 家の近くにある学校であること	10 ^{べんきょう} 勉強についていけず ^{りゅうねん} 留年や中退の恐れがないこと
2 ^{たこう} 他校より優秀な学校であること	11 ^{しょうらい} 将来つきたい職業 ^{しよくぎょう} に結びつくこと
3 ^{とくべつ} 特別な内容の授業 ^{じゅぎょう} があること	12 ^{がっこう} その学校を卒業した後の進学 ^{しんがく} に有利であること
4 ^{けんがく} 建学の理念や校風 ^{こうふう}	13 ^{がっこう} その学校を卒業した後の就職 ^{しゅうしよく} に有利であること
5 ^{ちゅうがっこう} 中学校の先生のすすめ ^{せんせい}	14 ^{ゆうじん} 友人と同じ学校であること
6 ^{じゅく} 塾や家庭教師の先生のすすめ ^{せんせい}	15 ^{にゅうぶ} 入部を希望する部活動 ^{ぶかつどう} があること
7 ^{おや} 親や親戚のすすめ ^{しんせき}	16 ^{にゅうし} 入試に合格できそうなこと
8 ^{ないしんてん} 内申点・内申書 ^{ないしんしょ}	17 ^た その他（具体的に
9 ^{おや} 親が以前通っていた学校であること ^{いぜんかよ}	18 ^{じゅうし} どれも重視しない

出典：「中学生と母親パネル調査」

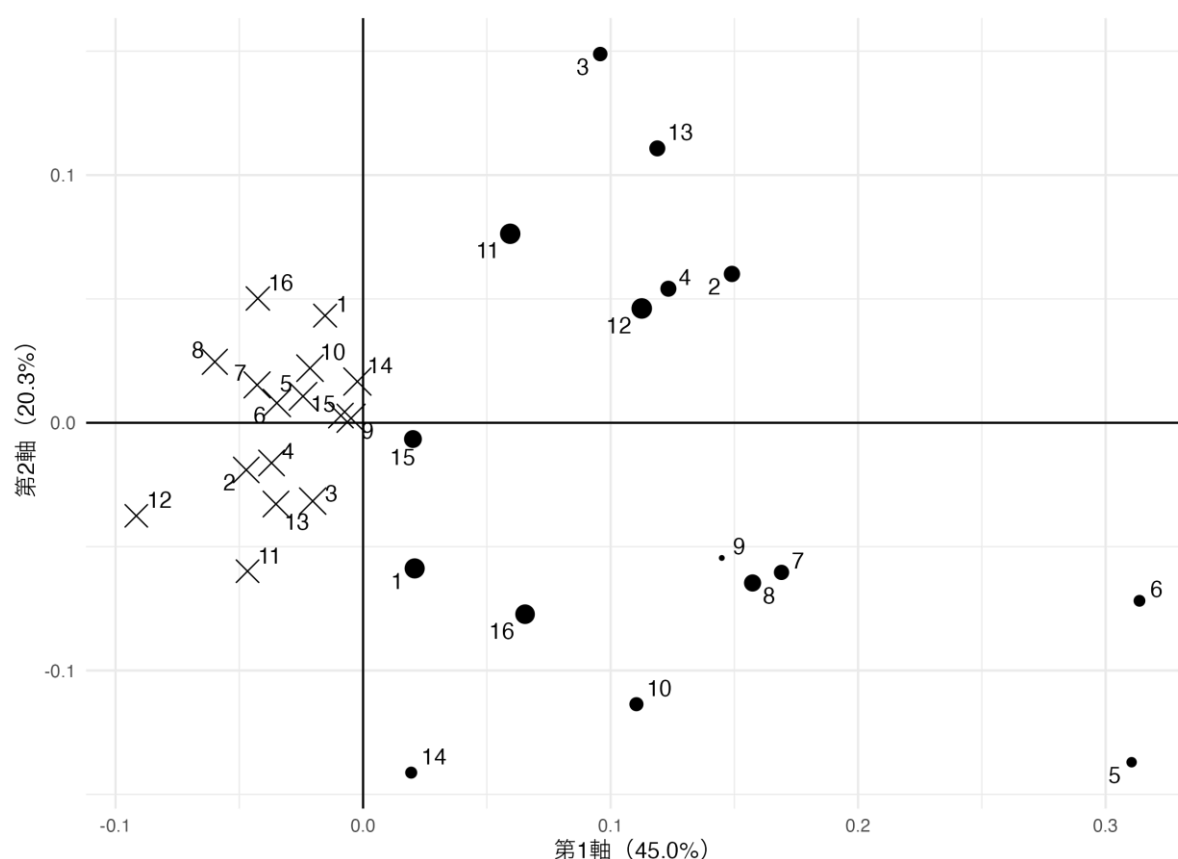


図表 5－2 学校を選ぶ上で重視することの割合

出典：「中学生と母親パネル調査」 注：値はパーセント

3. 選択肢間の関連

ではどのような項目が同時に選ばれやすいのか、選択肢間の関連を集約したい。図表 5-1 に示されている (1) ～ (16) までの変数を用いた多重対応分析 (Multiple Correspondence Analysis : MCA) によってその傾向を明らかにする。分析の結果は図表 5-3 に示した。



図表 5-3 多重対応分析の結果 (第 2 軸まで)

出典 : 「中学生と母親パネル調査」

注 : ●は選択された場合、×は選択されなかった場合を示し、大きさはそのカテゴリの割合に比例させている。

多重対応分析によってカテゴリ変数全体のばらつきの 45.0%が第 1 軸によって、そして 20.3%が第 2 軸によって説明されており、第 1 軸と第 2 軸で 65.3%のばらつきが説明されている。図表 5-3 の●は重視すると回答した (選択した) 場合を、×は選択されなかった場合を示す。まず大きく選択される場合 (右側) と選択されない場合 (左側) に分かれる。また選択される場合、対応分析の結果から次の A～E の 5 つの大きくカテゴリをまとめることができるだろう。ただし、近い数字のものが同じグループになりやすいという調査設計上の問題

も考慮する必要がある。

【A】

- 「(5) 中学校の先生のすすめ」
- 「(6) 塾や家庭教師の先生のすすめ」

これは先生の意見に関する選択肢である。

【B】

- 「(2) 他校より優秀な学校であること」
- 「(3) 特別な内容の授業があること」
- 「(4) 建学の理念や校風」
- 「(11) 将来つきたい職業に結びつくこと」
- 「(12) その学校を卒業した後の進学に有利であること」
- 「(13) その学校を卒業した後の就職に有利であること」

これは学校の特徴に関する選択肢である。

【C】

- 「(7) 親や親戚のすすめ」
- 「(8) 内申点・内申書」
- 「(9) 親が以前通っていた学校であること」

このグループは親に関する選択肢と内申点・内申書に関する選択肢からなる。近い数字の選択肢のため一緒に選ばれやすいという可能性もあるが、先生以外からの何らかの情報を重視しているかどうかの選択肢といえる。

【D】

- 「(1) 家の近くにある学校であること」
- 「(14) 友人と同じ学校であること」
- 「(15) 入部を希望する部活動があること」
- 「(16) 入試に合格できそうなこと」

このグループはこれまでの学校生活との連続性を重視している選択肢といえる。「(15) 入部

を希望する部活動があること」は【B】に近いが、中学時の部活と高校の部活との連続性が、学校選択で重要である可能性も考えられる。

【E】

「(10) 勉強についていけず留年や中退の恐れがないこと」

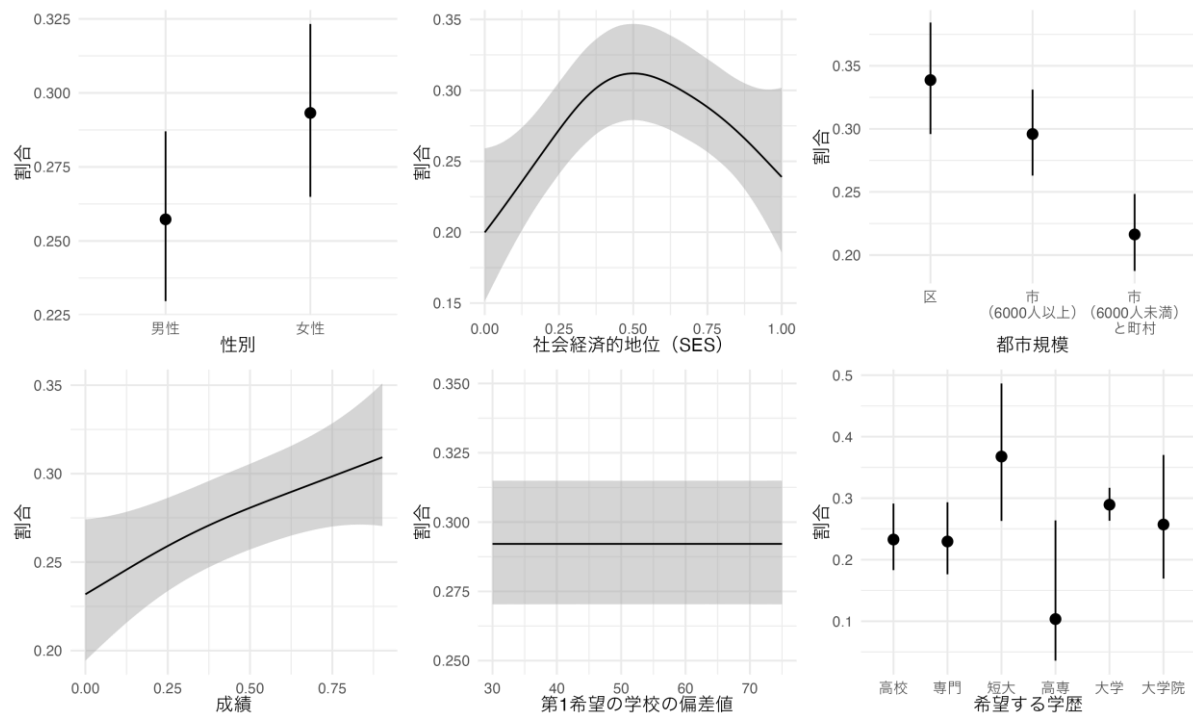
これは【C】と【E】の方向の中間に位置する。これまでの学校生活の経験や成績（情報）から予測される学校選択の結果に関するものであり、他の選択肢とはやや傾向が異なるのかもしれない。

「(8) 内申点・内申書」は「(16) 入試に合格できそうなこと」と方向的には似ているものの、やや異なる傾向をみせており、合格可能性とはまた別の高校選択の判断基準となっている。

4. 誰が内申点・内申書を気にしているのか

最後に誰が内申点・内申書を重視しているのかについての基礎的な分析を行う。分析に用いるのは性別、社会経済的地位（socio-economic status: SES）、都市規模、成績、第1希望の学校の偏差値、希望する学歴である。社会経済的地位には、親の学歴、職業、所有する財、年収、貯蓄の変数に多重対応分析を適用したうえで求められた第1軸のスコアを用いる。成績は、中学3年次の全体、国語、数学、理科、社会、英語の自己評価（「上のほう」「真ん中より上」「真ん中くらい」「真ん中より下」「下のほう」）を得点化し、それらを平均したものをを用いる。都市規模は3分類を用いる。

結果は図表5-4に示した。(1) 男性よりも女性の方が、(2) 社会経済的地位が低かったり高かったりする場合よりも真ん中くらいのほうが、(3) 区部や規模の大きな市に住んでいる方が、(4) 成績が低いよりも高いほうが、そして(5) 短大や大学を希望している方が、中学3年生の生徒は学校を選ぶ上で内申点・内申書を重視することが分かる。なお、(6) 第1希望の学校の偏差値と内申点・内申書の重視は関連していない。



図表 5－4 内申点・内申書を重視する割合

出典：「中学生と母親パネル調査」 NA は「その他」「欠損値」

5. 結論

内申点・内申書は高校選択においてもっとも重視される要素ではないものの、少なくない生徒がそれをもとに高校を選択している可能性が示された。またそれは、先生のすすめや学校の校風とは異なる高校選択の基準であることが示された。そして、基礎的な分析からは、生徒の特徴によって内申点・内申書を重視するかどうか異なっていることが明らかになった。

中村・林川（2020）は、内申書が学力的に中位に位置する生徒に意識される傾向があることを指摘したが、本章は成績ではなく社会経済的に中位層の生徒が内申書を重視していることを明らかにした。ただし、中村・林川（2020）とは対象者や質問の内容、分析方法などが大きく異なるため、結果を直接比較することはできない。また、他の変数を統制した場合、得られる結果が異なる可能性がある。しかし、上位でも下位でもなく中位に位置する生徒が内申書を意識したり重視している可能性が本章でも観察されたことは、誰が内申書を意識し重視するのかを考える上で、また高校入試制度が生徒に与える影響を考慮する上で重要な視点である。

[文献]

- 藤原翔. 2021. 「中学生と母親パネル調査からみる COVID-19 : 若者の仕事、教育、健康へのインパクト」『社会科学研究』 73(1):107-128.
- Fujihara , Sho and Takahiro Tabuchi. 2022. “The Impact of COVID-19 on the Psychological Distress of Youths in Japan: A Latent Growth Curve Analysis.” *Journal of Affective Disorders*. 305 19-27.
- 中村高康・林川友貴. 2020. 「高校入試における調査書の意味と機能に関する実証的研究 (1) : 「入試制度と学校生活に関する調査」の仕様と基礎分析」『東京大学大学院教育学研究科紀要』 60:373-82.

第三部 資料編

資料 1 高校入学者選抜制度の全国的状況¹

1. はじめに

本資料の目的は、現行の公立高校の入学者選抜制度（以下、高校入試制度）について、内申書評価に焦点化した上で、都道府県別に記述し、そこに簡潔な考察を加えることである。

高校入試制度は都道府県行政の裁量が大きいことから、都道府県による差異が目立つにもかかわらず（香川ほか 2014）、とりわけ近年では地域ごとにどのような様相を呈しているのか十分に検討されているとは言い難い。しかし、どの高校に入学するかが高卒後の進路を大きく規定することからわかる通り（樋田ほか編 2014 など）、日本において高校入試選抜は非常に重要な意味合いを帯びていることから、高校入試の仕組みをまず把握しておくことは意義ある取り組みとなる。

以上を踏まえ、本資料では中学生の学校生活や進路選択に少なからず影響すると考えられる内申書評価の側面から高校入試制度について都道府県別に素描することとする。具体的に、内申書にておいて、(1) どの学年の内申点を評価に組み込み、また各学年の評価比率はどうなっているか、(2) 内申点における実技教科の傾斜配点はどうなっているか、の 2 点に焦点化して検討する。こちらについて都道府県別の現況を表としてまとめることで、基礎資料を提供することを目指す。

また、上記のほかに推薦（特色）選抜の廃止やそれに伴う入試の一本化、学区の撤廃、入試定員の公私比率など取り上げるべき制度的特徴は数多いが、本資料では紙幅の都合もありそれらに言及することはできない。ただし、それら制度的特徴をまとめ、そちらに簡単な記述と説明を加えた資料は、中村高康研究室 HP (<https://www.p.u-tokyo.ac.jp/~tknaka/>) にて公開予定であるので、別途ご覧いただきたい。

以降の情報は一部を除き、令和 5 年度に各都道府県の教育委員会が公表している資料（公立高等学校入学者選抜実施要項など）を参照して作成している。

2. 内申点の学年別比率

調査書の評定（内申点）は、すべての都道府県の公立高校入学者選抜において選抜資料として重要な位置付けを付与されていることから、中学生の学校生活に対して少なからず影響をもたらしていると言って間違いないであろう。例えば、入試における内申書重視の下では、内申書の評価を上げることを狙って授業中に熱心に発言することや、反対に内申書に書かれ

¹ 執筆担当：田垣内義浩（東京大学大学院教育学研究科博士課程）

ることを恐れて評価を下げる行動を抑制するという事態がみられることは想像に難くない。このように考えると、内申書評価は多くの中学生の学校生活を大いに巻き込み、長期にわたって影響しうることは明らかであり、それだけ実態は注視しておくべきと考えられる。

ただ、ここで重要となってくるのは、どの学年の内申点を入試評価に含めるかやその学年別比率をどうするかは、都道府県で様ではないということである。具体的に述べるならば、一方では全学年の内申点が同等に評価される県もあれば、他方では3年生の内申点のみ選抜に利用される県もある。全学年の内申点を同様に評価する都道府県であれば、理念上は中学校生活の全期間を通して先生の目を気にして過ごさなければならないだろうし、また1年生でひとたび低い評価を付けられてしまえばその後挽回することが難しくなるという事態が想定できる。他方で、3年生の内申点しか評価しない都道府県であれば、上記の影響は相対的に希釈されるだろう。

以上を念頭に置き、本稿では現行の内申点の学年別比率を都道府県別に確認する作業をしておくこととしたい。図表・資料 1-1 は、都道府県別に内申点の学年別比率を示したものである²。ここでは一般選抜に関して提示しているが、その理由としては推薦（特色）選抜と比して、より多くの中学生が受験する、かつ同一県内であれば高校による評価基準の差異が相対的に小さいと想定できるからである。ただ、一部の都道府県を除き、推薦（特色）選抜についても大まかには同様であることは付言しておく。

図表の右寄りに示した中3比率は内申点のうち中学3年生時の内申点が占める比率を指すが、この数値について都道府県別に眺めてみると、地域別にその制度が様ではないことが際立つだろう。まず、中3のみしか内申点を評価しない都道府県（中3比率：100%）が一定程度存在し、その数は11都道府県（山形、東京、長野、福井、静岡、愛知、三重、兵庫、鳥取、福岡、鹿児島）と4分の1程度に上る。

以上みてきた中3のみを換算する都道府県とは対照的に、それ以外の4分の3と多数の都道府県は中1や中2も内申点に含めている。その中でも詳しくみていくと、中1を含めず中2と中3の2年間のみを換算しているのは3県（神奈川、富山、奈良）にとどまり、33道府県とその大半は中1から中3まで全学年を幅広く対象としている。とりわけ、中1から内申点として含める都道府県における中学生にとって、早い時期から内申点を高めるよう取り組みをしないことは高校受験において不利になりかねないだろう。

以上のように内申書評価として組み入れる学年に違いが生まれる背景には地域的要因があるのではないかと考えられるが、例えば中3のみしか換算しない都道府県の地域的特徴を

² 埼玉県と宮崎県が空白になっている事情について説明しておく。埼玉県で空白となっているのは、一般選抜に関しても内申点の学年別比率は高校ごとの裁量が認められているためである。ただし、中1～中3までが評価に組み込まれ、3年生の比重が大きいことが一般的であることは付け加えておく。また、宮崎県でも中1～中3までが評価に組み込まれるが、どのように入試点に換算されるかは非公表なために空白としている。

図表・資料１－１ 都道府県別にみた内申点の学年別比率（％）

	中1	中2	中3	中3比率	中1：中2：中3
北海道	90	90	135	42.9%	1：1：1.5
青森	45	45	45	33.3%	1：1：1
岩手	110	220	330	50.0%	1：2：3
宮城	65	65	65	33.3%	1：1：1
秋田	45	45	65	41.9%	1：1：1.4
山形	0	0	45	100.0%	0：0：1
福島	65	65	65	33.3%	1：1：1
茨城	45	45	45	33.3%	1：1：1
栃木	45	45	45	33.3%	1：1：1
群馬	45	45	45	33.3%	1：1：1
埼玉					
千葉	45	45	45	33.3%	1：1：1
東京	0	0	65	100.0%	0：0：1
神奈川	0	45	90	66.7%	0：1：2
新潟	45	45	45	33.3%	1：1：1
山梨	110	110	110	33.3%	1：1：1
長野	0	0	45	100.0%	0：0：1
富山	0	45	90	66.7%	0：1：2
石川	45	45	45	33.3%	1：1：1
福井	0	0	45	100.0%	0：0：1
岐阜	45	45	90	50.0%	1：1：2
静岡	0	0	45	100.0%	0：0：1
愛知	0	0	90	100.0%	0：0：1
三重	0	0	45	100.0%	0：0：1
滋賀	45	45	45	33.3%	1：1：1
京都	65	65	65	33.3%	1：1：1
大阪	90	90	270	60.0%	1：1：3
兵庫	0	0	250	100.0%	0：0：1
奈良	0	45	90	66.7%	0：1：2
和歌山	45	45	90	50.0%	1：1：2
鳥取	0	0	130	100.0%	0：0：1
島根	45	45	90	50.0%	1：1：2
岡山	45	45	110	55.0%	1：1：2.4
広島	45	45	135	60.0%	1：1：3
山口	45	45	45	33.3%	1：1：1
徳島	65	65	65	33.3%	1：1：1
香川	45	45	130	59.1%	1：1：2.8
愛媛	45	45	45	33.3%	1：1：1
高知	65	65	130	50.0%	1：1：2
福岡	0	0	45	100.0%	0：0：1
佐賀	45	45	45	33.3%	1：1：1
長崎	45	45	45	33.3%	1：1：1
熊本	45	45	90	50.0%	1：1：2
大分	65	65	130	50.0%	1：1：2
宮崎					
鹿児島	0	0	450	100.0%	0：0：1
沖縄	55	55	55	33.3%	1：1：1

みてみても、東海地方（愛知、三重、静岡）で多いことはわかるものの、大都市圏や地方県の区分でみても、または東北地方など地方ブロック別にみても明確な傾向性を読み取ることは難しい。やはり都道府県ごとの政策的な選択が強く効いているということなのだろうが、この点についてはこれまでの政策的な経緯をつぶさに分析していくことで理解は深まってい

くだろう。

以上の通り、どの学年を対象とするか（低学年の内申点を入試点として含めるか）に関しては、都道府県の間で小さくない違いがみられることがわかる。ただ、一方で確認しておかなければならないのは、上記のような制度上の違いこそあれ、すべての都道府県で共通して3年生の内申点比率がもっとも高くなっていることである(33%～100%)。その中でも、内実に立ち入ってみていくと、もっとも多いのは全学年で同等の比率(33%)を設定している19県、続いて中3のみを対象(100%)とする11県、中3が半数を占める8県、3分の2を占める3県、6割を占める2県、そしてそれ以外が続いていく（中3の比率が低い順に、40%、43%、55%、59%）。ここからは、都道府県による程度の差こそあれ、一般選抜の内申点という観点から述べるならば、中3の1年間がもっとも重要ということになる。ただ、中3がもっとも重要という共通点はあるにせよ、中2までの内申書評価を対象とするか、またその程度はどれほどかといった点には都道府県別に見逃せないほどの差異が見出せるのであるから、こうした制度的特徴が及ぼしうる影響は丹念に確認していくことが課題として挙げられるだろう。

3. 実技教科の傾斜配点

一部の学科・コースを除き、実技教科は一般選抜において課されないことが一般的であることから、内申点において傾斜配点がなされることがある。ここではその点について全国的な傾向を確認しておきたい。学力検査で問われない以上、実技教科が傾斜配点されることは、生徒の能力をより多角的な視点から判断するといった場合、理にかなっている実践のようにも考えられる。ただ、こうした傾斜配点は実技教科に苦手意識を持っている層にとって負担となっていることは想像に難くないだろう。ここでは、こうした基礎的な認識を共有した上で、全国的な傾向について検討しておきたいと考える。

図表・資料1-2は、一般選抜について、都道府県別に実技教科の傾斜配点なされているか否か、そしてなされている場合、実技教科がどの学年において何倍に傾斜配点がなされているか示したものである。また、5教科と比べたときに何倍になっているか示すために、5教科も掛け算されている場合には実技教科の隣の欄にその倍率を記入している³。

³ 高知は中3において全教科とも5段階評定ではなく、10段階評定であるため、実質的に5教科が2倍、実技教科が4倍ということになる。

図表・資料 1－2 実技教科の傾斜配点

	有無	中1倍率		中2倍率		中3倍率	
		5教科	実技教科	5教科	実技教科	5教科	実技教科
北海道	×	2倍	3倍 2倍 2倍 2倍	4倍	6倍 2倍 2倍 2倍	6倍	9倍 2倍 2倍
青森	×						
岩手	○						
宮城	○						
秋田	○						
山形	×						
福島	○						
茨城	×						
栃木	×						
群馬	×						
埼玉	×	2倍	3倍	2倍	3倍	2倍	3倍
千葉	×						
東京	○						
神奈川	×						
新潟	×						
山梨	○						
長野	×						
富山	×						
石川	×						
福井	×						
岐阜	×	2倍	2倍	2倍	2倍	4倍	7.5倍
静岡	×						
愛知	×						
三重	×						
滋賀	×						
京都	○						
大阪	×						
兵庫	○						
奈良	×						
和歌山	×						
鳥取	○	2倍	2倍	2倍	2倍	2倍	2倍
島根	×						
岡山	○						
広島	×						
山口	×						
徳島	○						
香川	○						
愛媛	×						
高知	○						
福岡	×						
佐賀	×	2倍	2倍	2倍	2倍	2倍	4倍
長崎	×						
熊本	×						
大分	○						
宮崎	非公表						
鹿児島	○						
沖縄	○						

図表をみると、実技教科を傾斜配点するのは16都道府県とマジョリティではないが、一定程度採用されている制度であることが読み取れる。採用している都道府県を垣間見てみると、岩手や秋田など東北地方や岡山や徳島など中四国地方で多いようにも考えられるが、こうした地方において周囲の県の動向を参照しつつ類似の政策的な選択をしている可能性は存在するだろう。また、その大半は2倍という傾斜得点であるものの、鹿児島県では20倍と非常に高い加配がなされており、その政策的背景を探ることも重要であるように考えられる。

以上からは、大半ではないものの、少なくない都道府県で実技教科の傾斜得点が行われていることを確認することができた。

1. おわりに

これまで高校入試制度に関しては、都道府県別の差異が大きいにもかかわらず、その状況に関して全国的に見渡した例はほとんどみられなかった。たしかに、本資料においても入試制度を少ない点から羅列したにとどまっているが、このような試みがあまりない以上、資料的な価値はもちうるのではないかと考えている。

今後の課題としては、大まかに3点指摘できるだろう。第一に、香川ほか(2014)が高校教育の提供構造において4つのカテゴリーを提示したように、高校入試制度に関して都道府県をいくつかのカテゴリーにまとめてしまうことで、より見通しを良くすることである。たしかに、都道府県ごとの裁量は大きいし、入試制度にみられる差異は小さくないのであるが、ただ差異が存在すると述べるだけでは高校入試制度やそれが中学生の学校生活や教育選択にもたらす影響を議論する際に生産的ではないだろう。第二に、都道府県別の入試制度を規定する要因を探究することである。もちろん、あるひとつの要因が強く効いて制度が形作られているといえるほど単純ではないだろうが、この点について明らかにしていくことで、高校入試選抜に関する理解も深まるように考えられる。第三に、都道府県別の入試制度が実際に中学生にいかなる影響をもたらしているかということである。この点については、未解明の部分が数多く残されているのであり、実態把握を進めることによって、単に少子化など時代状況に合わせて制度を改革しようとするのではなく、中学生という試験を受ける側の立場に立って、より良い制度設計を試みていくことが重要であると考えられる。

以上、3つの課題は相互に排反しているのではなく、少なからず関わり合いを持っており、これらそれぞれを合わせて取り組んでいくことで、高校入試という選抜現象を理解することにつながるのではないだろうか。

〔文献〕

樋田大二郎・荻谷剛彦・堀健志・大多和直樹編. 2014. 『現代高校生の学習と進路：高校の「常

識」はどう変わってきたか?』学事出版.

香川めい・児玉英靖・相澤真一. 2014. 『〈高卒当然社会〉の戦後史: 誰でも高校に通える社会は維持できるのか』新曜社.

資料 2 調査票（東京都・ペーパー版）

次ページ以降で実際に調査に用いた調査票を掲載する。本研究においては、序章でも説明したように調査はペーパー版による郵送回収と、インターネットによるオンライン回収を併用した。そのため、調査票のレイアウトなどは回収モードによる違いがあるが、調査項目についてはまったく同じ項目を用いている。そのため、ここではペーパー版のもののみを掲載している。また、X 県の調査票については、高校入試制度の違いのために若干のワーディングの違い、および一部項目の変更があるが、X 県の県名を公表するかどうかについては現時点では検討中であるため、X 県バージョンの調査票については掲載していない。

なお、この各調査項目の基礎集計に関しては、掲載を予定していたが、分量が非常に多くなるため割愛し、オンライン上で参照できる形とする予定である。以下の中村研究室ホームページを参照していただきたい。

<https://www.p.u-tokyo.ac.jp/~tknaka/2022study>

高校入試制度と学校生活に関する調査

2022 年 8 月

(研究代表者) 東京大学大学院教育学研究科

教授 中村高康

(調査実施機関) 一般社団法人 中央調査社

このアンケートは、東京都の高校生の皆さんが経験した高校入試や中学校生活に関する意識や行動についてお聞きすることで、教育制度の改善や教育についての研究に活用しようとするものです。

皆さんの回答はそのまま匿名のデータとして統計的に処理されますので、誰が何を答えたのかが他の人に知られることはありません。

また、回答は任意ですので、お答えになりたくない質問に無理に答えていただく必要はありません。

できるだけ多くの質問にお答えいただけることがデータの質を高めることになりますので、ご理解の上ご協力よろしくお願い申し上げます。

ご記入にあたってのお願い

◇この調査には、**必ず郵便の宛名のご本人様**がご回答ください。

◇質問にしたがって、あてはまる選択肢の番号などに○をつけてください。

また、() などの回答欄がある場合は、回答欄にお答えをご記入ください。はみ出しても構いません。

◇右上にある「番号」は、調査票が返送されたかどうかの確認や集計を匿名で行うためのものです。

お名前を書いていただく必要はありません。

◇この調査は、「郵送」のほかに「インターネット」からご回答いただくこともできます。「インターネット」から回答する場合は、同封の「インターネットによる回答のご案内」をご覧ください。

誠に恐縮ですが、「郵送」でご回答いただく場合には、8月29日(月)までに、同封の返信用封筒にてご投函(切手は不要)くださいますようお願いいたします。回答方法にかかわらず、ご協力いただいた方には、後日、クオカード(500円)を送付させていただきます。

問1. はじめにあなた自身のことについてうかがいます。

問1-1. あなたの性別をお答えください。(○は1つ)

①②=13

③~⑥

⑦=1

1. 男性	2. 女性	3. その他
-------	-------	--------

⑧

問1-2. あなたが通っていた小学校と中学校は次のうちのどれにあてはまりますか。

それぞれあてはまるもの1つに○をつけてください。(○はそれぞれ1つ)

ア) 小学校	→	1. 公立	2. 私立	3. 国立	4. その他
イ) 中学校	→	1. 公立	2. 私立	3. 国立	4. その他

⑨

⑩

問 1-3. あなたは高校受験をしましたか。(○は1つ)

1. した	2. していない (附属中学から無試験で進学など)	3. その他 ()	⑪
-------	------------------------------	---------------	---

問 1-4. あなたは現在、学校に通っていますか。

(○は1つ)

1. 通っている	2. ほとんど通っていない (30日以上連続で欠席している)	3. 中退した	4. 中学卒業後、 進学していない	⑫
----------	-----------------------------------	---------	----------------------	---

次ページ問 1-6へ

【問 1-4で「1～3」を回答した方にお聞きします】

問 1-5. あなたが現在在籍している学校についてお答えください。

(中退した場合は以前通っていたことのある学校についてご記入ください)

a) 学校のある都道府県： _____	⑬
b) 学校種： 1. 高等学校 2. 中等教育学校 3. 高等専門学校 4. 専修学校 5. その他 ()	⑭
c) 公立か私立か： 1. 公立 2. 私立 3. 国立 4. その他	⑮
d) 学校名(差し支えない場合のみ)： _____	⑯
e) 学科： 1. 普通科 2. 工業科 3. 商業科 4. 農業科 5. 総合学科 6. その他 (具体的に記入： _____)	⑰
・コース名(コースがある場合のみ記入。例：特進コース) ()	⑱
f) 入学難易度： 1. 難しい 2. やや難しい 3. ふつう 4. あまり難しくない 5. 難しくない	⑲
g) 進学状況(四年制大学に進学している人の割合)： 1. ほぼ全員 2. 7～8割 3. 半数くらい 4. 2～3割 5. ほとんどいない 6. よくわからない	⑳
h) 家からの通学手段と通学時間： 1. 家から徒歩や自転車で通学できる 2. 家から電車やバス一本で通学できる 3. 家からいくつかの電車やバスの路線を乗り継いで通学できる 4. その他 ()	㉑
・通学時間(片道) () 時間 () 分	㉒～㉔

【全員の方に】

問 1-6. あなたが中学校 3 年生の時に居住していた市区町村は現在と同じですか。

もし違う場合は、居住していた市区町村について教えてください。

1. 同じ	2. 違う (➡	都・道・府・県	市・区・町・村)	②5 ②6
-------	----------	---------	----------	----------

問 1-7. あなたには、次のことがどれくらいあてはまりますか。ア～ウそれぞれについて、

あてはまる番号 1 つに○をつけてください。(○はそれぞれ 1 つずつ)

		あてはまる	あてはまる まあ	あてはまらない あまり	あてはまらない	
(回答例)	→	1	②	3	4	
ア) 女性には男性ほど学歴はだいじではない	→	1	2	3	4	②7
イ) 学歴は高くても、将来の得にはならない	→	1	2	3	4	②8
ウ) 権威のある人々には常に敬意を払わなければならない	→	1	2	3	4	②9

問 2. あなたの中学校時代の経験についてうかがいます。

問 2-1. あなたは中学校で次のようなことをしたことがありますか。

あてはまる番号 すべてに ○をつけてください。(○はいくつでも)

1	2	3	4	5	
学級委員 (級長・クラス長)	生徒会役員	委員会の委員長・ 副委員長	部活動の部長・ 副部長	どれも経験して いない	③0

問 2-2. 中学校時代のあなた自身について、以下のア～ノ(4 ページへ続く)のそれぞれのことがらに

ついて、あてはまる番号 1 つに○をつけてください。(○はそれぞれ 1 つずつ)

		あてはまる	まああてはまる	どちらとも いえない	あてはまらない あまり	あてはまらない	
ア) 生徒会長・生徒会役員に立候補したことがある	→	1				5	③1
イ) 学級委員に立候補したことがある	→	1				5	③2
ウ) 部活動の部長・副部長に立候補したことがある	→	1				5	③3
エ) 学校内のその他の係や委員に自分から進んでなった ことが多い	→	1	2	3	4	5	③4
オ) ボランティア活動を積極的にやった	→	1	2	3	4	5	③5

(問 2-2 の続き) 中学校時代のあなた自身について、以下のカ～ノのそれぞれのことからについて、
あてはまる番号1つに○をつけてください。

		あてはまる	まああてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	あてはまらない	
(○はそれぞれ 1 つずつ)							
カ) 部活動に積極的に取り組んだ	→	1	2	3	4	5	③⑥
キ) 同級生や後輩の面倒をよく見てあげた	→	1	2	3	4	5	③⑦
ク) 遅刻が多かった	→	1	2	3	4	5	③⑧
ケ) 欠席が多かった	→	1	2	3	4	5	③⑨
コ) 生徒会・委員会活動に積極的に取り組んだ	→	1	2	3	4	5	④⑩
サ) 学級活動に積極的に取り組んだ	→	1	2	3	4	5	④⑪
シ) 先生によくしかられた	→	1	2	3	4	5	④⑫
ス) 校則を守った	→	1	2	3	4	5	④⑬
セ) 授業をまじめに聞いていた	→	1	2	3	4	5	④⑭
ソ) 授業中は積極的に発言した	→	1	2	3	4	5	④⑮
タ) 休み時間や放課後に先生によく質問しにいった	→	1	2	3	4	5	④⑯
チ) 掃除の時間はまじめに掃除をした	→	1	2	3	4	5	④⑰
ツ) 先生に反発することがあった	→	1	2	3	4	5	④⑱
テ) 友だちとはうまくやっていた	→	1	2	3	4	5	・
ト) 運動会などの学校行事に積極的に参加した	→	1	2	3	4	5	・
ナ) 定期テストの成績が上がるようにがんばった	→	1	2	3	4	5	・
ニ) 小テストをがんばった	→	1	2	3	4	5	・
ヌ) 提出物はきちんと提出した	→	1	2	3	4	5	・
ネ) 資格(英検、漢検など)の取得をがんばった	→	1	2	3	4	5	・
ノ) よく忘れ物をした	→	1	2	3	4	5	・

問 2-3. あなたは、高校受験の際に用いられる内申書（調査書）をどの程度意識して生活していましたか。

ア～オのそれぞれの時期ごとに、あてはまる番号 1 つ に○をしてください。

（○はそれぞれ 1 つずつ）

		意識して いた	ま あ 意識して いた	あ ま り 意 識 し て い な か っ た	ま っ た く 意 識 し て い な か っ た
ア) 中学校入学のころ	→	1	2	3	4
イ) 中学 1 年の半ばごろ	→	1	2	3	4
ウ) 中学 2 年の半ばごろ	→	1	2	3	4
エ) 中学 3 年の 1 学期ごろ	→	1	2	3	4
オ) 中学 3 年の 2 学期ごろ	→	1	2	3	4

問 2-4. 内申書（調査書）について、次のようなことはあなたにあてはまりますか。

ア～キのそれぞれについてあてはまる番号 1 つ に○をしてください。（○はそれぞれ 1 つずつ）

		あ て は ま る	ま あ あ て は ま る	あ ま り あ て は ま ら な い	あ て は ま ら な い
ア) 先生から「内申書に書くぞ」といわれた	→	1	2	3	4
イ) 内申書は受験結果を左右すると思っていた	→	1	2	3	4
ウ) 内申書を入試に使わないでほしいと感じた	→	1	2	3	4
エ) 学校での日常の態度や取り組みを入試で評価してほしい	→	1	2	3	4
オ) 成績評価に「主体的に学習に取り組む態度」の項目があるのは 良いことだ	→	1	2	3	4
カ) 高い内申点を取るの難しいことではない	→	1	2	3	4
キ) 内申書の「主体的に学習に取り組む態度」の評価は高かった	→	1	2	3	4

問 2-5. 次の項目のなかで、内申書（調査書）をよくするために、意識してやったことがあるものはどれですか。ア～ノのそれぞれについて、あてはまる番号 1 つに○をしてください。

⑦=2

(○はそれぞれ 1 つずつ)		あてはまる	まああてはまる	どちらとも いえない	あまり あてはまらない	あてはまらない	
ア) 生徒会長・生徒会役員に立候補した	→	1				5	⑧
イ) 学級委員に立候補した	→	1				5	⑨
ウ) 部活動の部長・副部長に立候補した	→	1				5	⑩
エ) 学校内のその他の係や委員に自分から進んでなった	→	1	2	3	4	5	⑪
オ) ボランティア活動を積極的にやった	→	1	2	3	4	5	⑫
カ) 部活動に積極的に取り組んだ	→	1	2	3	4	5	⑬
キ) 同級生や後輩の面倒をよく見てあげた	→	1	2	3	4	5	⑭
ク) 遅刻しないようにした	→	1	2	3	4	5	⑮
ケ) 欠席しないようにした	→	1	2	3	4	5	⑯
コ) 生徒会・委員会活動に積極的に取り組んだ	→	1	2	3	4	5	⑰
サ) 学級活動に積極的に取り組んだ	→	1	2	3	4	5	⑱
シ) 先生にしかられないようにした	→	1	2	3	4	5	⑲
ス) 校則を守った	→	1	2	3	4	5	⑳
セ) 授業をまじめに聞くようにした	→	1	2	3	4	5	㉑
ソ) 授業中は積極的に発言するようにした	→	1	2	3	4	5	㉒
タ) 休み時間や放課後に先生によく質問しにいった	→	1	2	3	4	5	㉓
チ) 掃除の時間はまじめに掃除をした	→	1	2	3	4	5	㉔
ツ) 先生に反発しないようにした	→	1	2	3	4	5	㉕
テ) 友だちと仲良くしているようにふるまった	→	1	2	3	4	5	㉖
ト) 運動会などの学校行事に積極的に参加した	→	1	2	3	4	5	㉗
ナ) 定期テストの成績が上がるようにがんばった	→	1	2	3	4	5	㉘
ニ) 小テストをがんばった	→	1	2	3	4	5	㉙
ヌ) 提出物はきちんと提出した	→	1	2	3	4	5	㉚
ネ) 資格（英検、漢検など）の取得をがんばった	→	1	2	3	4	5	㉛
ノ) 忘れ物をしないようにした	→	1	2	3	4	5	㉜

問 2-6. 中学校時代の学校生活について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

ア～クそれぞれについてあてはまる番号 1 つに○をつけてください。

		あてはまる	あてはまる まあ	あてはまらない あまり	あてはまらない	
	(○はそれぞれ 1 つずつ)					
ア) 自分の学校が好きだった	→	1	2	3	4	③③
イ) 先生のことを好きだった	→	1	2	3	4	③④
ウ) 学校に行きたくないことがあった	→	1	2	3	4	③⑤
エ) 先生は自分を正しく評価してくれた	→	1	2	3	4	③⑥
オ) 自分に自信があった	→	1	2	3	4	③⑦
カ) 自分は明るい性格だった	→	1	2	3	4	③⑧
キ) 自分は大人しい性格だった	→	1	2	3	4	③⑨
ク) 他人がどう言おうと、自分がこうと思ったことは主張した	→	1	2	3	4	④⑩

問 2-7. あなたの 5 教科の成績は、学年の中でおよそ次のどれにあたりますか。ア～ウのそれぞれの時期ごとに、あてはまる番号 1 つに○をつけてください。(○はそれぞれ 1 つずつ)

ア) 中学校 1 年生の時の成績	1. 上	2. 中の上	3. 中の中	4. 中の下	5. 下	④①
イ) 中学校 2 年生の時の成績	1. 上	2. 中の上	3. 中の中	4. 中の下	5. 下	④②
ウ) 中学校 3 年生の時の成績	1. 上	2. 中の上	3. 中の中	4. 中の下	5. 下	④③

問 2-8. あなたが中学校 3 年生の時の内申点は、次のどれにあたりますか。正確でなくてもよいので、おおよその値を教えてください。ア～ケそれぞれについて、あてはまる内申点の番号 1 つに○をつけてください。(○はそれぞれ 1 つずつ)

ア) 国語 →	1	2	3	4	5	カ) 音楽 →	1	2	3	4	5
イ) 社会 →	1	2	3	4	5	キ) 美術 →	1	2	3	4	5
ウ) 数学 →	1	2	3	4	5	ク) 保健体育 →	1	2	3	4	5
エ) 理科 →	1	2	3	4	5	ケ) 技術家庭 →	1	2	3	4	5
オ) 英語 →	1	2	3	4	5						

問 2-9. 高校入試の評価において、あなたが理想と考える（入試当日の）学力検査点と内申点（調査書）の比率に○を1つだけつけてください。現在の都立高校の一般入試では、基本的に学力検査点と内申点は7：3の比率で評価されています。（○は1つ）

学力検査点のみ	学力検査点と内申点が同等	内申点のみ
10：0 -- 9：1 -- 8：2 -- 7：3 -- 6：4 -- 5：5 -- 4：6 -- 3：7 -- 2：8 -- 1：9 -- 0：10		

問 2-10. 中学校の時、あなたはふだん（夏休みではないふつうのとき）、1週間に何回くらい、学習塾（公文のような学習教室も含む、英会話教室は除く）に行っていましたか。1日に2ヶ所行くときは「2回」と数えてください。

ア～オそれぞれの時期について、あてはまる番号1つに○をつけてください。

（○はそれぞれ1つずつ）	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回以上	行っていない
ア) 中学校入学のころ →	1	2	3	4	5	6	7	8
イ) 中学1年の半ばごろ →	1	2	3	4	5	6	7	8
ウ) 中学2年の半ばごろ →	1	2	3	4	5	6	7	8
エ) 中学3年の1学期ごろ →	1	2	3	4	5	6	7	8
オ) 中学3年の2学期ごろ →	1	2	3	4	5	6	7	8

【高校受験を経験した方にお聞きします。それ以外の方は、問4に進んでください。】

問 2-11. あなたが高校受験のための勉強（模擬試験対策、過去問演習など）をしていた時期はいつですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。（○はいくつでも）

1. 中学入学の前 2. 中学1年生 3. 中学2年生 4. 中学3年の1学期ごろ
5. 中学3年の2学期ごろ 6. 高校受験のための勉強をしていない

問 2-12. あなたは、次の時期に高校入試の業者テスト（模試）を受けましたか。受けていれば、業者テスト名と偏差値について教えてください。偏差値は正確でなくてもよいので、おおよその値を回答してください。それぞれの時期に複数回受験した場合は、高校入試の時にもっとも参考にした模試の結果について教えてください。

	業者テスト（模試）を…	業者テスト名・偏差値を教えてください
ア) 中学3年の1学期ごろ	1. 受けた 2. 受けていない	• 業者テスト名： 1. 都立Vもぎ 2. 都立Wもぎ 3. その他（ ） • 偏差値はおおよそ（ ）
イ) 中学3年の2学期ごろ	1. 受けた 2. 受けていない	• 業者テスト名： 1. 都立Vもぎ 2. 都立Wもぎ 3. その他（ ） • 偏差値はおおよそ（ ）

問 3. あなたの高校入試の経験についてうかがいます。

⑦=3

問 3-1. あなたの第 1 志望校について、ア～オそれぞれの時期ごとに教えてください。

	第 1 志望校は決まっていたか	設置者・学校名・学科を教えてください	
ア) 中学校入学 のころ	1. 決まっていた 2. 決まっていなかった	設置者：1. 国立 2. 公立 3. 私立 4. その他 学校名：() 高等学校 学 科：1. 普通科 2. 工業科 3. 商業科 4. 農業科 5. 総合学科 6. その他	⑧ ⑪
イ) 中学 1 年の 半ばごろ	1. 決まっていた 【ア) と違う】 2. 決まっていた 【ア) と同じ】 3. 決まっていなかった	設置者：1. 国立 2. 公立 3. 私立 4. その他 学校名：() 高等学校 学 科：1. 普通科 2. 工業科 3. 商業科 4. 農業科 5. 総合学科 6. その他	⑫ ⑮
ウ) 中学 2 年の 半ばごろ	1. 決まっていた 【イ) と違う】 2. 決まっていた 【イ) と同じ】 3. 決まっていなかった	設置者：1. 国立 2. 公立 3. 私立 4. その他 学校名：() 高等学校 学 科：1. 普通科 2. 工業科 3. 商業科 4. 農業科 5. 総合学科 6. その他	⑯ ⑲
エ) 中学 3 年の 1 学期ごろ	1. 決まっていた 【ウ) と違う】 2. 決まっていた 【ウ) と同じ】 3. 決まっていなかった	設置者：1. 国立 2. 公立 3. 私立 4. その他 学校名：() 高等学校 学 科：1. 普通科 2. 工業科 3. 商業科 4. 農業科 5. 総合学科 6. その他	⑳ ㉓
オ) 中学 3 年の 2 学期ごろ	1. 決まっていた 【エ) と違う】 2. 決まっていた 【エ) と同じ】 3. 決まっていなかった	設置者：1. 国立 2. 公立 3. 私立 4. その他 学校名：() 高等学校 学 科：1. 普通科 2. 工業科 3. 商業科 4. 農業科 5. 総合学科 6. その他	㉔ ㉗

問 3-2. あなたは高校入試（推薦や併願優遇なども含む）において何校受験しましたか。

() 校

㉘㉙

問3-3. あなたが受験した高校について、受験日程の早い順から受験した学校をすべて（最大で7校）教えてください。

私立高校の一般入試において併願優遇制度を利用した場合、「一般」ではなく「併願優遇」に○をつけてください。また、同じ高校を複数回受験した場合は、分けてすべて記入してください。

	受験校は、	入試方法・志望順位・受験結果を教えてください
ア) 1校目	1. 国立 2. 公立 3. 私立 4. その他（1つに○） （ ） 高等学校 1. 普通科 2. 工業科 3. 商業科 4. 農業科 5. 総合学科 6. その他（1つに○）	入試方法：1. 一般 2. 推薦 3. 併願優遇 4. その他 志望順位：第（ ） 志望 受験結果：1. 合格 2. 不合格
イ) 2校目	1. 国立 2. 公立 3. 私立 4. その他（1つに○） （ ） 高等学校 1. 普通科 2. 工業科 3. 商業科 4. 農業科 5. 総合学科 6. その他（1つに○）	入試方法：1. 一般 2. 推薦 3. 併願優遇 4. その他 志望順位：第（ ） 志望 受験結果：1. 合格 2. 不合格
ウ) 3校目	1. 国立 2. 公立 3. 私立 4. その他（1つに○） （ ） 高等学校 1. 普通科 2. 工業科 3. 商業科 4. 農業科 5. 総合学科 6. その他（1つに○）	入試方法：1. 一般 2. 推薦 3. 併願優遇 4. その他 志望順位：第（ ） 志望 受験結果：1. 合格 2. 不合格
エ) 4校目	1. 国立 2. 公立 3. 私立 4. その他（1つに○） （ ） 高等学校 1. 普通科 2. 工業科 3. 商業科 4. 農業科 5. 総合学科 6. その他（1つに○）	入試方法：1. 一般 2. 推薦 3. 併願優遇 4. その他 志望順位：第（ ） 志望 受験結果：1. 合格 2. 不合格
オ) 5校目	1. 国立 2. 公立 3. 私立 4. その他（1つに○） （ ） 高等学校 1. 普通科 2. 工業科 3. 商業科 4. 農業科 5. 総合学科 6. その他（1つに○）	入試方法：1. 一般 2. 推薦 3. 併願優遇 4. その他 志望順位：第（ ） 志望 受験結果：1. 合格 2. 不合格
カ) 6校目	1. 国立 2. 公立 3. 私立 4. その他（1つに○） （ ） 高等学校 1. 普通科 2. 工業科 3. 商業科 4. 農業科 5. 総合学科 6. その他（1つに○）	入試方法：1. 一般 2. 推薦 3. 併願優遇 4. その他 志望順位：第（ ） 志望 受験結果：1. 合格 2. 不合格
キ) 7校目	1. 国立 2. 公立 3. 私立 4. その他（1つに○） （ ） 高等学校 1. 普通科 2. 工業科 3. 商業科 4. 農業科 5. 総合学科 6. その他（1つに○）	入試方法：1. 一般 2. 推薦 3. 併願優遇 4. その他 志望順位：第（ ） 志望 受験結果：1. 合格 2. 不合格

問 3-4. 高校を選ぶ上で重視したことはどれですか。あてはまる番号すべてに○をしてください。また、○をつけた中で最も重視した選択肢の番号を空欄に記入してください。（○はいくつでも）

⑦=4

- | | |
|--------------------|---------------------------|
| 1. 家の近くにある学校であること | 10. 友人と同じ学校であること |
| 2. 学力の面で優秀な学校であること | 11. 部活などの面で優秀な学校であること |
| 3. 学校の雰囲気・校風 | 12. その学校を卒業した後の進学に有利であること |
| 4. 中学校の先生のすすめ | 13. その学校を卒業した後の就職に有利であること |
| 5. 塾や家庭教師の先生のすすめ | 14. 入試に合格できそうなこと |
| 6. 親や親戚のすすめ | 15. できるだけお金がかからないこと |
| 7. 内申点・内申書 | 16. その他（具体的に ） |
| 8. 業者テスト（模試）の偏差値 | 17. どれも重視しない |
| 9. 校内の領域診断テストの点数 | |

⑧

⑨



○をつけた中で最も重視した選択肢（番号）は（ ）

⑩⑪

問 3-5. あなたは高校を決める際に、次の人と進路についてよく話しましたか。ア～カそれぞれについて、回答例を参考に、あてはまる時期すべてに○をつけてください。

（○はあてはまる時期にすべて）

		中学校入学のころ	中学一年の半ばころ	中学二年の半ばころ	中学三年の一学期ころ	中学三年の二学期ころ	進路について あまり話さなかった
（回答例）	→	1	②	③	4	⑤	6
ア）母 親	→	1	2	3	4	5	6
イ）父 親	→	1	2	3	4	5	6
ウ）きょうだい	→	1	2	3	4	5	6
エ）中学の先生	→	1	2	3	4	5	6
オ）塾や予備校の先生	→	1	2	3	4	5	6
カ）友だちや先輩	→	1	2	3	4	5	6

⑫

⑬

⑭

⑮

⑯

⑰

問 3-6. 進路選択に関する次のようなことについて、あなたにはどれくらいあてはまりますか。
ア～クそれぞれについてあてはまる番号 1 つに○をつけてください。

		あてはまる	あてはまる まあ	あてはまらない あまり	あてはまらない	
(○はそれぞれ 1 つずつ)						
ア) もう少し難しい高校に挑戦したかった	→	1	2	3	4	⑮
イ) 学校の先生は、思っていたよりも難しい高校をすすめた	→	1	2	3	4	⑰
ウ) 学校の先生から、あまり高望みしないように注意された	→	1	2	3	4	⑳
エ) 塾の先生は、思っていたよりも難しい高校をすすめた	→	1	2	3	4	㉑
オ) 塾の先生から、あまり高望みしないように注意された	→	1	2	3	4	㉒
カ) 親は、思っていたよりも難しい高校をすすめた	→	1	2	3	4	㉓
キ) 親から、あまり高望みしないように注意された	→	1	2	3	4	㉔
ク) 今の高校に入ってよかったと思っている	→	1	2	3	4	㉕

〔東京都にある高校（国立や私立を含む）を受験した方にお聞きします。〕
それ以外の方は、問 3-8 に進んでください。

問 3-7. 高校入試に関する次のような経験や考え方について、あなたにはどれくらいあてはまりますか。
ア～コそれぞれについてあてはまる番号 1 つに○をつけてください。

		あてはまる	あてはまる まあ	あてはまらない あまり	あてはまらない	わからない	
(○はそれぞれ 1 つずつ)							
ア) 推薦入試の集団討論がなくて良かった	→	1	2	3	4	5	②⑥
イ) 公立高校入試は推薦と一般の 2 回ある方が良い	→	1	2	3	4	5	②⑦
ウ) 内申書評価には学校差があると思った	→	1	2	3	4	5	②⑧
エ) 男女別に入学定員があるのは不公平だ	→	1	2	3	4	5	②⑨
オ) 面接が嫌だった	→	1	2	3	4	5	③⑩
カ) 英語のスピーキングテストは高校入試にあったほうが良い	→	1	2	3	4	5	③⑪
キ) 私立高校の面談で模擬試験の成績を求められた	→	1	2	3	4	5	③⑫
ク) 校内の領域診断テストの点数は参考になった	→	1	2	3	4	5	③⑬
ケ) 私立高校の授業料の負担軽減（私立高等学校等授業料軽減助成金事業）のおかげで受験校の選択肢が広がった	→	1	2	3	4	5	③⑭
コ) 塾の推薦制度で私立高校に合格した	→	1	2	3	4	5	③⑮

問 3-8. 高校入試について、あなたが一番改善してほしいと思っていたことは何でしょうか。
自由に書いてください。

36

【 全員の方に 】

問 4. あなたの高校卒業後の進路についてうかがいます。
現在、高校に通っていない方も含めてお答えください。

問 4-1. あなたは、高校卒業後にどのような進路をとりたいと思ってきましたか。次のア～カの時期ごとに、1～7の中から、あてはまる番号 1 つ に○をつけてください。
複数ある場合でも、最もあてはまる番号 1 つ を選択してください。（○はそれぞれ 1 つずつ）

		就職する（家の仕事を 手伝う場合も含む）	専門学校に進学したい	短大に進学したい	大学に進学後、 就職したい	大学に進学後、 大学院に進学したい	その他	まだ決まっていない
ア）中学校入学のころ	→	1	2	3	4	5	6	7
イ）中学1年の半ばごろ	→	1	2	3	4	5	6	7
ウ）中学2年の半ばごろ	→	1	2	3	4	5	6	7
エ）中学3年の1学期ごろ	→	1	2	3	4	5	6	7
オ）中学3年の2学期ごろ	→	1	2	3	4	5	6	7
カ）現 在	→	1	2	3	4	5	6	7

37

38

39

40

41

42

【あなたのご家庭の状況についてお聞きします。差しつかえない範囲でお答えください。】

問 5. あなたの家には、本（マンガ、雑誌、学習参考書以外）はどれくらいありますか。本棚の幅が1メートルでだいたい40冊になります。
あなたの家族の本も含めて、あてはまる番号 1 つ に○をつけてください。（○は1つ）

1. 0～10冊

2. 11～25冊くらい

3. 26～100冊くらい

4. 101～200冊くらい

5. 201～500冊くらい

6. 500冊以上

43

問 6. 中学校に入学したころのあなたのお家のくらしむきは、次の 5 つに分けるとすれば、どれにあたりますか。あてはまる番号 1 つ に○をつけてください。（○は 1 つ）

1	2	3	4	5
豊か	やや豊か	ふつう	あまり豊かでない	豊かでない

④④

問 7. 次にあげるあなたのご家族は、通っていた学校での経験をあなたに話してくれることがありましたか。あてはまる番号 すべて に○をつけてください。（それぞれについて、○はいくつでも）

A-1 高校に通っていた方は…	A-2 そこでの経験を話してくれた方は…
1. 父 2. 母 3. 兄 4. 姉	1. 父 2. 母 3. 兄 4. 姉
5. 1～4 以外の方 6. あてはまる人はいない	5. 1～4 以外の方 6. あてはまる人はいない

④⑤
④⑥

B-1 専門学校・短大・高専に通っていた方は…	B-2 そこでの経験を話してくれた方は…
1. 父 2. 母 3. 兄 4. 姉	1. 父 2. 母 3. 兄 4. 姉
5. 1～4 以外の方 6. あてはまる人はいない	5. 1～4 以外の方 6. あてはまる人はいない

④⑦
④⑧

C-1 大学に通っていた方は…	C-2 そこでの経験を話してくれた方は…
1. 父 2. 母 3. 兄 4. 姉	1. 父 2. 母 3. 兄 4. 姉
5. 1～4 以外の方 6. あてはまる人はいない	5. 1～4 以外の方 6. あてはまる人はいない

・
・

問 8. 中学校 3 年生の時、あなたはどなたと同居していましたか。あてはまる番号 すべて に○をつけ、（ ）には人数を記入してください。単身赴任等で長期不在の方がいる場合、3 ヶ月に 1 度以上の割合で帰宅する場合には同居に含めます。3 ヶ月を超えて不在の場合は同居には含めません。（○はいくつでも）

1. 父	2. 母	3. 兄（ ）人	4. 姉（ ）人
5. 弟（ ）人	6. 妹（ ）人		
7. 祖父（ ）人	8. 祖母（ ）人		
9. その他の同居者（ ）人	（具体的に： ）		

・
・～・

それぞれあてはまる番号 1 つに○をつけてください。（○はそれぞれ 1 つずつ）

ア) 父 → 1. はい 2. いいえ

イ) 母 → 1. はい 2. いいえ

あてはまる番号1つに○をつけてください。(○は1つ)

1. 事務職 （企業・官公庁における一般事務、経理、内勤の営業など）
2. 販売職 （小売・卸売店主、店員、不動産売買、保険外交、外勤のセールスなど）
3. サービス職 （理容・美容師、料理人、ウェイトレス、ホームヘルパーなど）
4. 生産現場職・技能職
（製品製造・組立、自動車整備、建設作業員、大工、電気工事、農水産物加工など）
5. 運輸 （トラック・タクシー運転手、船員、郵便配達、通信士など）
6. 保安職 （警察官、消防官、自衛官など）
7. 専門職・技術職
（医師、看護師、弁護士、教師、技術者、デザイナーなど専門的知識・技術を要するもの）
8. 管理職 （企業・官公庁における課長職以上、議員、経営者など）
9. その他 （具体的に： ）
10. 働いていない
11. わからない

同封の返信用封筒にてご投函ください。（切手は不要です）